# 表紙, 目次, 漫錄, 通信


| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-10-04<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/38526 |

# 十全會雜誌

明治四十年六月二十九日發行

金澤醫學專門學校十全會

第四十六號
第四十七號
合刊

《非賣品》

# 十全會雜誌（第四十六號第四十七號）合刊目次

## ○原著及實驗


○耳根治手術後ニ於ケル二個岩狀骨ノ病理的所見ヲ述ベテ其被皮機轉ト後チノ聽覺ニ受ボスベキ影響ヲ論ス　特別會員　濱地藤太郎

○Ueber Sublimat-Intoxikation　特別會員　飯森益太郎

○結麗阿曹篤 Kreosotum ノ下熱作用ニ就テ　特別會員　溝口龍三


## ○漫錄


○疾病美を論ず……林琴柱

○故東長平氏を悼む……笹岡芳名

○五月雨……德久翠流


○運動會余興行列歌集

傳染病毒驅除隊化裝行列の歌

醫三館凱歌の曲

滑稽提灯行列の歌

## ○會報


○創立紀念式

○創立紀念日祝歌

○春季陸上運動會役員

○第一回春季陸上大運動會記

○彌次日記

○下平教授の近信

○御斷り


## ○通信


○飯森益太郎君通信

○英佛噬旅行……界外隱士


## ○會告


○寄贈及交換書目○四十年度金澤醫學專門學校十全會經費豫算○四十年度金澤醫學專門學校十全會校外特別會員會費收入豫算書○同會費支出豫算書

○校外十全會費納付調書


## ○廣告

○數件

# 漫錄

## ○疾病美を論ず

林琴柱

疾病美、あまりに大膽なる語にあらずや、厭惡醜陋を以て見らるゝかれに就て、果して吾人が美感を惹起するや否やこれ大に疑問なり。

而して美の解釋は如何、美學上の說は暫らくをさ、兎に角吾人の感情界に快感的に働く一種の作用なりと云ひうべし、尙一步進んで吾人感情に陽的刺戟として働さ而して感情がこれを拒絕せざる程度を以て美の範圍とするも敢て不可なからんか。

しかく感情的なる美は決して批判的のものにあらず、又絕對的のものにあらず、美學として論ぜらるゝもこれ只强いて系統的に律せんとするのみにして終に科學の範圍に入るべきにあらざるなり。

故に甲の美とする所必ずしも乙の美とする所にあらず、丙の醜とする處却て丁の美とすることあるなり、同者にして一の場合と他の場合とに於て已に美醜の顚倒あるは終に免かれざる處なり。

かくの如く美は單純のものにあらずして甚た複雜なる者なり、時、場處、人、種々の關係相錯互し相連絡し初めて兩者の決定をなすなり、「痘面も靨」この語充分にこの間の消息を語るにあらずや、

又見よ

大德が糞へりをはす枯野かな

醜の醜なるものも終に吾人に些の惡感をも與へず、寧ろ一種の美感を惹くにあらずや、時、場處、人、終に吾人が感情を顚倒せり、

狐火や髑髏に雨のたまる夜に

これ又恐るべく忌むべきものを化して、更に進んで一種の凄美感を與ふるにあらずや、これ一例のみ、天下何物かその適所を得ば美的光輝を放たざるものあらんや、而かも一步を進めて見んか、物には兩面あり、事には表裏あり、絕對の惡なく、窮極の醜なし、鬼の眼にも涙なきにあらず、冷めたき仕打にもあたゝかき情はしるなり、善人には善人だけの良處あると同じく、惡人には惡人だけの美点あるなり。

以上論じ來りしより見れば、排拆嫌惡してをかざる疾病に就て美を論ずる何の怪しむ所をも見ざるなり、而して已に怪美、醜美が美學の一要素として認容されたる今日、疾病美豈に獨りゆるされざる理あらんや。

○

人の疾病に對するや己に先天的に讎敵として生れたり、その所以は論ずる迄もなく、嫌惡、醜陋總ての惡文字は彼れが頭上に被せらるゝなり、惡の權化、悲しみの源泉となす、吾人これを拒まず、然れどもこの先入主たる觀念を以て直ちに他の方面までも沒却して顧みず、これ豈に雅量あるものゝなす所ならんや。

人は總ての物に趣味をもたざる可らず、趣味は何物にも活色を與ふ、顏回か一簞食一瓢飮彼れが貧に對しての趣味は自ら天を樂しましめたり、うれしき笑に趣味あれば、悲しき涙にも趣味あるべし、天は吾人に趣味の發見を命じたり、萬物はかくして和氣あるなり、獨斷的の惡感は大にさけざる可らず、而して吾人は疾病に對して趣味の慈眼を点じ、其美的方面の開拓につとむる又天の意にあらずや。

かく言へばとて吾人は決して疾病の大惡果を狹量の美点を以て消却せんとするものにあらず、只彼れがために聊かの罪亡ぼしをなすなり、利息を濟しやるなり、然れども其意余りありて吾筆はすりきれたり、ために却て利息を重ね、罪に罪を加ふるや知る可らず、これもとより吾が罪なり。

余が玆にいはんとする所の疾病美は決して狹義的のものにあらず外延的のみにあらずして內延的方面を見んと欲するなり、美學的美のみにあらずして、今一步を進めたり。

○

疾病美は陽的ならず男性に對する女性的美なり、櫻の如く艷ならず、菫の如く優ならず、オルガンの如く珍ならず、笛の如く瓏ならず、梅花なり、洞簫なり、揚妃が豐艷なきも、飛燕が情怨あり、彼れを華々しき春の色とすれは、これを寂しき秋の趣とすべし、

見よ肺に惱める女のやゝ痩せたる頰にうく紅一点、ほつれげの三筋四筋ものうげにかきあげたる李花一枝雨になやめる風情にあらずや、

夜も更け渡れる冬の夜などヒステリや精神病の患者の十七八なるがあだなる振りに物狂うしき、凄艷の極と云ふべし。

人のいみ嫌ふ咯血も眞白き布に少しく花と散りし、又一種の凄美なり。

美しき人の腹痛むとて、面(おもて)すこしゝかめて美しき齒に紅の唇かめる、まことや西施が顰にならふも又故なきにあらざるなり。

又はあだなる者の頭にてもいたむとや、顳顬(こめかみ)に梅干など貼したる一種の風情なり。

歯の揃いて細かく小さき、此上なき美しきものなれども前歯の少し欠けて黒ずみたるが笑ふ度にほの見ゆる、又云ふ可らざる風情あり。

いかなる病に眼をやみつぶしたる、八つ九つの子の、かわゆき聲あげて三味を習へる、いぢらしの思にうたれざるを得ず。

手術台にのれる美少年の麻醉やかゝりたる、微動もせぬに、白衣の人の手に光れるメスあはやふれんとする刹那よ、吾れは常に云ふ可からざる感想に自分を忘るゝなり。

草青き公園は白衣着たる傷病兵の杖によりて逍遙せる様を誰れか醜態と見たりし者やある。

癩病的遺傳者の殊更眉目よき、色白き、多くはこれ事實なり。

而して余は歷史をよんで關が原の役の條に至り、大谷刑部が身天刑病になやんで命旦夕にせまり、骨肉腐落するにも拘らず、意氣に感ぜし友のために、戰場を馳弛せる、悲壯の極に泣かざらんとして能はず、いかにしてかその病に對して醜惡の感をいだく暇あらんや。

かくの如く一々これを觀察すれば枚舉に暇あらずと雖も他を推して知るべし。

その他疾病に對する化學的檢査顯微鏡的檢査等に於てあらはるゝ光彩的美觀等の如き今こゝに論ぜず。

○

疾病の肉體に於けると同じく精神も亦大に關係あり、吾人の思想吾人の感情かれがために大に左右さる、然して多くは惡影響にして美的分子を發見せざるが如しと雖、翻つて顧れば又一美天地のうこに横はれるを見るなり。

疾病は吾人の感情をして單純ならしむ、彼れは昨日の如く虚僞の衣を着せず、汚れたる靴をつけず、故に生來の躰體なり、本然の素足なり、眞情流露眞に神の子なり、彼れは心より泣き、心より喜ぶ、善人惡人美人傑士を問わざるなり。

強慾無悲の鬼も病故にかれが本來の善に返へれる例古今に乏しからず。

又親を戀ひ子を慕ふ人間の眞情はこれによりて美しくあらはされたるにあらずや、「親に先立つ道しなければ」病鬼を感ぜしめしも尤もなり。

不治の病の戀人に厄を及ぼさんを恐れては身にあまる想をすてはつる、人間本然の美点にあらずや。

尚近く能登の一少女が病みて自ら起たざるを知るや、その平素よりの貯金を學校へ寄附せし如き同じく然り。

疾病は又時に身体の衰弱に反して益〻精神の分明を來し、これに剌戟を與へこれに興奮を與へ以て意外の良果を結ばしむることあり。

又時に靜慮を與へ、反省を與へ、或は立命の地を與ふることあり、平素閑却されたる問題は今や彼れに蘇生し來るなり。茲に於てか彼れはこれを思ひ彼れを斷じ、惡念をかり、善想を摘み、進んで眞理に近かんとするにつとむ、靜慮反省の美感（敢てしか云はん）は時に肉体の惱を忘却するに至るなり。

良知の鴻論は龍場が僻地に肺に惱みつゝありしの結果ならずや。

山陽の筆はかれが咯血によりて益々光彩を添へ來れり。

子規の日本派俳句を開ける又力を專らにするに與りて力ありしにあらざらんか。

一年有半はいかにしてなりしか、病臥三年は如何にして成りしか、云ふ迄もなけん。

少しく趣異なれどもかの天才として世の渴仰稱贊をうるものも、一種の精神異常なりとさへ云はるゝに至れり。

以上以て疾病の吾人が精神に一抹の彩色を点ずる大体を見るに足らんか。

○

これを要するに疾病美は陰性的なり、プラスにあらずマイナスなり、凄艶幽美はかれが本體なり、沈痛悲壯はろの生命なり、派手に對する地味なり快活の色なき代りに浮氣の心もなし、かれが色は散りてゆく花の風情とせば、かれが聲はたろがれ時の鐘の音なり、周密沈痛なるが故によく吾人の腹底までもしみゆきて寸分の隙なし、これ疾病美に多とすべき處にして、而かも吾人は又春風の衣に照々たるよりも、時に金氣の肌をさすを快とすることあるなり、疾病美必らずしも捨つべき者ならんや。

前にも述べたる如く人多く疾病の外觀を獨斷して、意外の美点を注意せざるは甚だ誤まれる次第、況んや吾人常に疾病と寸時も離る可らざる關係あるものに於てをや、今若し茲に一箇の栗ありとせよ、ろの毬彙（イガ）の痛きの故を以て、ろの實のうまきをとらざらんには人はこれを賢なりといはんや、疾病いぢめに從事する吾人は時に彼れが美点を稱す、敵を愛する者の曠量にあらずや、

終りに臨んで、疾病のために罪亡しせんとして果していやが上の罪をそへたるを深くはづ。

（漫錄）

## ○故東良平氏を悼む

左の一篇は去三月十八日故本會特別會員東良平氏葬送の節、笹岡芳名君が同氏の棺前に於て朗讀せられたる吊辭なりと云ふ

人世凡そ夢の如く亦幻の如し、雪と消えゆく君が身の上を想へば、赫灼たる日露戰役の勳功と、測り知られぬ外科學界に忠實なりしことゝ、その手術の熟達とに

於て、金澤醫學專門學校及び木村醫學博士及知己諸氏をして重視しせられたりき、われ亦君の知を忝ふし茲に手術を見學せしこと六閱月、窃に我校出身の先輩として又師として敬慕の念に堪ざるものありき、而して今や君は、星の如き數しられぬ幾多のわれ等をよそにして浮世の三十幾年を夢の如くしづかに眠り玉ひぬ嗚呼清めに降るか雪は巴に散りしきるよ、悲哉。

一塞生　笹岡芳名

## ○五月雨

家事上の都合によりて本校を退かれたる舊本會雜誌部委員德久翠流君か近作なりとて示されたるものを左に　（編者）

○　德久翠流

万恨の解けて牡丹の美なる哉
五月雨や古剣をつゝむ雨の脚
灯取蟲彼も大きい望かな
時鳥閨燈淡く人のかげ
家一つ又一つ岩の清水かな

○　德久翠流

美しき團扇の音もはたとやみて君が姿の動きしからみ
川添の舘まばゆく夕日してカーテンを吹く初夏の風

## ○運動會余興行列歌集

### ○傳染病毒驅除隊化裝行列の歌

（醫學科二年級余興）

傳染病驅除隊主意

一陣の業風既に落華の吹雪を散らし、嫩葉萌えて十里の長堤綠を帶ぶ、茲に本校獨立紀念日なる五月十一日の佳辰を卜して、盛大なる第一回陸上運動會を開催せらるゝに際して、醫學科第二年級は、嶄新にして奇拔なる餘興を擧行せん事を企圖し、幾多の腦漿を搾つて考案せるものは、即ち傳染病毒驅除隊なり。

古來世の人の恐怖せる傳染病は、星移り物變ると倶に、數多の學者の熱心ある研究に懸りて、其本體は愈々闡明せられたりと雖、病魔の勢も亦倍々猖獗にして縱に其暴威を逞うす、人之れに侵れては或は苦悶の渦中に呻吟し、或は殤天の悲運に遭遇し、甚しきは延て餘殃を一族子孫に傳導するもの擧て數ふ可からず、噫、萬物の靈長として誇張せる吾人五尺の躰軀も、么微ある下等生物の爲に擒縱せらるゝに至ては、喟然として長大息せざらんと欲するも能はず、余輩が造次顚沛の間尙克く衛生を嚴重にして、之を未發に豫防し、既發に牽制して、此惡病を芟除するの緊要なるは、徒に冗語を須ゐずして明なり、仍て吾徒は屢々世人を襲ふ傳染病九種を選びて毒菌を摸擬し、一睨の下に其容姿を顯はし、惡魔の驅除に必要なる公吏を派遣せしめ且消毒に從事する人夫を從へて撲滅を藥劑を運搬せしめ、以て當該傳染病を其根源より勦滅するの眞相を現實ならしむ、庶幾くは看者の注意を喚起して將來自他の爲に、豫防と消毒とに顧慮せられ、聊か之が救拯の動機ともならば、黃吻兒の餘興も亦必らずしも稗益なしと謂ふ可からず

獅子王永遠に眠らむや　蛟龍常に潛まんや
風雲來り北陸の　健兒の意氣や溢れ來ぬ

見よや假裝の行列を　傳染病の魔の軍
ペストは中の大王よ　天地震はす力あり

コレラは軍の總大將　乾坤鳴らす力あり
セキリ、マラリヤ丹毒菌　チブス菌やテタヌス菌

ヂフテリ菌は共倶に　一方の軍の旗頭
怒濤捲かんず力あり　狂風呼ばんず力あり

殊に怪菌結核は　魔軍の中の老參謀
閃電起さん力あり　毒焔吐かん力あり

病魔の軍一蹴りに　閧世を照らす人は誰
濟々堂裡の健男兒　MA旗下の快男兒

## ○醫三舘旋歌の曲

（醫三新報附錄）

花を送りて新綠の　眺めは清し尾山城
雲間を洩るゝ弦月に　名のる杜鵑の一聲や。

あゝ清新の氣に滿てる　吾が世の夏の朝ぼらけ
希望の光活動の　調を高く歌へかし。

平和の窓に東西の　書を照しつ技を磨き
人と邦とは捧げむの　俠氣あふるゝ我儕なり。

今戰塵の起ち昇り　劒戟の音すさまじく
山河も震ふ叫喚に　猛獅か吾の狂へるは。

旺んなる哉くれなゐの　血潮に染みし草原に
萬軍脆く碎けては　覇權を我に捧げたり。

見よ優勝の旗高く　碧の空に飜へ
桂の冠榮光の　不滅の星と輝きて。

## ○滑稽提灯行列の歌

滑稽提灯行列、新式提灯ダンス共に中止せり、梅か枝の調（會場係余輿）

朧ろ夜に月が出て　運動會には僕が出た
月夜に提灯要らぬとは　何處の御方が申された

日の中は奥深う　箱入娘の一人法師
何のへちまの世の中も　ぶら〳〵してゝは暮れず

文明の先頭に立つ　電燈ぐらゐは何のその
僕等にや僕等の手足あり　之から晝でも出る覺悟

青春の血に燃ゆる　五百の健兒が運動會
眞面目腐つた唯中に　れ笑草の余興隊
踊りやんせ舞はしやんせ　今日は學校の紀念日じや
猫も杓子も化粧して　めでたき此日を祝へよや

○繃帶行列の歌　（醫學科四年級余興）

都合によりて校歌を用ひたり

＊　＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊　＊　＊

## 會報

## ○創立紀念式

五月十一日本校創立紀念式を濟々堂に擧ぐ、午前七時三十分職員生徒一同着席するや校長代理山碕敎授は左の祝辭に併せて運動會の成立始末と注意とを述べられ學生總代佐口榮氏の祝辭ありて式全く終る。

### 式辭

本校ハ茲ニ本日ヲ以テ第六回ノ紀念日ヲ迎ヘ諸子ト共ニ之ヲ祝スルヲ得ルハ本職ノ最モ光榮トスル處ナリ況ンヤ雲霧忽焉トシテ飛散シ宿雨頓ニ痕ヲ收メ此ノ如キ快晴ヲ得タルハ皇天モ亦本校ノ爲メ祝意ヲ表スルモノカ

回顧スレバ昨年祝典ヲ擧行シ以來烏兎匆々早ク業ニ一星霜ヲ經タリ其間未ダ著シキ進歩發達ノ見ルベキモノナシト雖モ醫學科藥學科ニ於テ百數十名ノ卒業生ヲ出ダシ醫學得業士若クハ藥學得業士トシテ社會ノ各方面ニ向發展シツヽアリ又職員ニ在テハ佐々木敎授ハ昨年八月獨乙國ヨリ歸朝セラレ現ニ敎鞭ヲ執リ孜々校務ニ努力セラル下平敎授ハ新タニ獨乙及瑞西ニ留學ヲ命セラレ目下瑞西國ベルン府ニ於テ研鑽セラレツヽアリ其他重ナル職員ノ異動ハ佐々木助敎授島田田中林村田ノ四講師南部囑託員等ハ新タニ就任セラレタルアリ然リ而シテ湯目敎授ハ休職ヲ命セラル獨リ最悲ムベキハ福見助敎授病魔ノ爲遂ニ不歸ノ客トナルコトニシテ此機會ヲ以テ哀悼追慕ノ至誠ヲ表白センコトス嗟呼

却說又本校積年ノ希望タル校舍新築ノ事モ近キ將來ニ於テ愈實行ヲ見得ベキハ信シテ疑ハザル所ナリ果シテ然ラバ前途倍々有望ト云ツベシ

終リニ臨ンデ一言諸子ニ望ム所無クンバアル可カラズ諸子ハ一意專心學業ヲ勵ミ品性ヲ高潔ニ持シテ社會ノ惡風潮ニ浸染スルコトナク常ニ屹然タル体度ヲ以テ己ヲ愼ミ苟モ過ナカランコトニ留意シ以テ父兄ニ對シ慰安ヲ與ヘ以テ學校教養ノ精神ヲ空フセザランコトニ力メ他日ノ大成ヲ期スベシ是畏クモ聖恩ニ報ヒ奉ルノ道ナリ乃テ聊カ所懷ヲ陳シテ式辭トス

明治四十年五月十一日

金澤醫學專門學校長代理
教授　山崎　幹

## ○創立紀念日祝歌

紀念日祝賀式は例によりて濟々堂に擧げられたること別項の如くなるが、今年始めて運動會開催の氣運に進み、從來の茶話會を廢して紀念菓子を職員生徒一同に分たる、其包袋には御家流の文字麗々しく左の如き創立紀念の祝歌を記さる。

天地と共に久しく祝ふなり
わが學びやのはじまりし日を

詠者曰。右の祝歌は「萬代と我もいはゝん學び舍のたちはじまりし日をうたひつゝ」とあるべき方優れる由なれば今後然か改められんことを。

## ○春季陸上運動會役員

會長　高安右人
委員長　櫻井小平太
審判係（赤白）　長　小川勝陳
金子治郎　南部彰義　三木榮末
影山清美　中野鑄太郎　柴野順吉
醫一　角田眞一　醫一　轟茂　醫二　小野澤庄桂
醫二　關柳太郎　醫三　吉川友信　醫三　酒井碩治
醫四　太田勘市　醫四　志田主稅　藥一　楠本晋平
藥二　津垣直吉　藥三　津田弘
競技係（黃）　長　上田計二
高山基重　村木維夫　佐々城清
楠正可　藤善稀雄　上野忠
菊池文岱　堀田圭藏　青木他吉郎
醫一　奥山義盛　醫一　中村喜太郎　醫一　武者素行
醫二　高儀京治　醫二　吉田隆治　醫二　佐竹秀一
醫三　金子義長　醫三　關根平　醫三　田中三彌
醫四　高野宗重　醫四　谷道清　醫四　長田八三郎
藥一　村垣梅市　藥二　森善次　藥三　丹波橘二
番組係（白）　長　宮田篤郎
金原三郎　林常雄　松田菊治

齊藤房治　宇野益之　絹川義溫
醫一 牧田泰重　醫一 重月貫一　醫二 山本直枝
醫二 鈴木伊作　醫二 國吉眞才　醫三 小林進
醫三 岡勝重　醫三 小林只四郎　醫四 吉田宗一
醫四 赤尾肇三　醫四 中村欣一郎　藥一 中山富二郎
藥二 大岩小一郎　藥三 數見宗一郎

會場係（赤）　長　山崎幹
石川喜直　田中一次郎　林篤
山本兵三郎　增野與三九　鴨脚光榮
崎田誠四郎　野崎芳孝　太田尙男
醫一 深谷藤市　醫一 馬詰定衛　醫一 北川文松
醫一 田川益三郎　醫一 成田高仁　醫二 森徹郎
醫二 山岸缶　醫二 永井敬孝　醫二 西村貞俊
醫三 服部暢助　醫三 寺田久十郎　醫三 守部廉次郎
醫三 中島鶴治　醫三 伊藤春馬　醫四 佐藤武
醫四 野村義雄　醫四 淺田耕造　醫四 小黑仁太郎
醫四 岡田秀造　藥一 岡部郁次郎　藥二 吉野積三
藥三 森正英

衞生係（赤十字）　長　佐々木達
小原芳雄　島田吉三郎　村山常三郎
醫四 佐口榮　醫四 猪飼善助　醫四 藤井一雄
藥三 實達佐市

庶務係（綠）　長　村上庄太
高柳鎌三郎　安達友直

## ○第一回春季陸上大運動會記

錦をかざす中秋の楓葉、音もなく散る梧葉の一群、白露團々、虫聲叢間にむせび、歸雁いつしか中天に飛び交ふ去年の秋、何は兎もあれ運動會、運動會成立に幾日の協議を凝らせしも早や一年の昔し、そゞろ當時の追懷の夢未だ醒めざるに、春爛熳の花の色、早くも褪せて遲櫻青葉の間に見をつかくれつ。新風颯々、新綠を摩し、暑からず寒からずてふ陽春の光景となりては、いかで名殘の惜しからざん。げにや慮生が見しとふ榮華の夢も醒むれば、あはれ一炊の間と聞く程に、こはこれ果敢なき蜉蝣が一瞬のまどろみ、そゞろ一年前の心地して中〳〵に忘れがたなき運動會成立！

出でゝ眺むれば四圍の山々雨を得て翠色更に深く、涼風北越の野を拭ひては萬里のかなたに飛び去り、陽炎の燃ゆるが如き夏の日影、いつの日にか襲ひ來らんとする。之ぞ所謂人外に出で、鉄腕健脚を競ふに適する好期なんめり。

五月十一日、我校創立紀念式當日擧行すべかりし我が校

十全會第一回春季陸上大運動會は端なくも暴風雨に流しやられて萬人の遺憾を一天に集めたりしも、順延の十二日は朝空カラリと晴れ渡りて今日ころはと思はしめたる程もなく、微雨一過の空模様、あはやといふ間もあらせず大粒の雨ボタリ〳〵と落ち來て、少からず一同が眉を顰めしもやがては晴れんと一縷の望みに、それと決心の合圖は轟〳〵花火二發に北陸の天地に傳へらる。

先づ會場は金澤病院（第二分教場）の后庭を以て之に充て、病院の正門前には運動會と扁額うつたる綠門鮮やかに聳ゆ、本館の屋上より四方へ引き渡せる萬國旗のその日の風の稍強きにはたゝきて彩ちら〳〵と美しく、四間に三間の日章旗、二十五丈の高き竿頭にひるがへりて十里四方よりも遠望せらるゝの美觀、何れ劣らぬ眺めなり。門に入りて左し更に右すれば自づと後庭に出づべく、其處には先づ內科の研究室を繕りて四明館の催しにかゝる標本陳列館あり

試みに券を示して館內に入れば、第一室に眼科學用の摸型標本、第二室には人体各部の臟器、全石膏細工、書圖を順序よく列べ、第三室には各臟器の病的變化（實物）寄生蟲、幷に全卵の標本、而かも一々觀覽者の鏡檢に便なる幾多顯微鏡の備付あり、用意到らざるなし、殊に九貫六百目の子宮筋腫は世界無双との說明書あり、加ふるに係委員が一々懇切に應答せられつゝありしは多とする所。第四室には外科手術に要する諸器具を始め、婦人科の標本など數多見るべきものあり、常に滿員の好況にて殊に目立ちたるは貴婦人、女學生の一團〳〵が立ちも去らず熱心に眺め入りたる風情！

こゝを出でゝ少しく進めば、左側非常門を開き一般觀覽者の休憩所たる靜修館に茶菓を具へ、右には綠門もて飾られたる醫三館に蓄音機を備へ茶菓を饗しつゝあり「醫三新報發行所」の一大廣告、人ために驚きて膽を潰したりとか。次に艸樂亭といへるは藥學科の接待所にして、外には石膏の立像を應用し、化學的作用に基きたる彩色噴水あり、意匠嶄新にして風致愛すべく、こゝに人垣は築かれて代はる〳〵その技術の巧なるに嘆賞しあへり、茶菓を饗すること例の如く、遺がに藥學だけありて摸範齒磨をさへ呈しつゝあり。是に隣りて一亭あり、四明館と號す、前には大なる綠門に國旗を交叉し、內には數十の卓を据ゑ蓄音機を置き、茶をすゝめ菓子を供へ、愛嬌ある口辯を弄して客を待つ。更に眼を場の東隅に轉ぜんか、城外の堅壁高く長くして萬里の長城を欺かんとす、名けて醫二館となす、醫一館は場の西北松影濃やかなるところに設けられたり。

坦々たるグラウンドは中央の矗々たる大柱より渡せる擬滿艦飾の、內埒の杭に樹てたる日章旗に飾られ、會長席を始め、來賓席、婦人席、各學校生徒席、仕度席など設けたれど人脚繁くして引きも切らざる盛況に何彼の見境

もつかず、來賓見る〳〵席にみち、一般縱覽席又寸地を余さず、高帽禮服の紳役人あれば法被脚胖の職工あり、知事男爵あれば素町人あり、丸髷の奥樣あり、宿屋の下女あり、蝦茶式部あり、子守あり、百姓あり、流行兒あり、獨人あれば英人あり、老幼男女、貴賤貧富、偉人凡骨雜り集ひ來るもの中〳〵多く、殆んど身動きをもなし得ざる程の混雜實に名狀すべからず。

かくて競技は午前九時、二發の號砲と共に場の一方より喇叭たる樂隊の音は起りて開始を傳へられぬ。

第一回　二丁競爭　輕裝せる勇士は續いて顯はれぬ、抽籤によりて順次己に定まり、等しく皆左足を出發線上に置く、此時万人の眼はみな競技者の上に注がれ、用意！の聲と共に体は齊しく前方に傾く殺那、銃聲一發耳底を劈けば、砂を捲き地を蹴り風に乘じて走る、嗚呼何ぞ夫れ壯なるや。（二十六秒）

一着　金子義長　二着　萩野茂次郎　三着　泉吉守

第二回　戴囊提灯競爭　走り過ぎて囊を落す者、落ちかゝり横になりつ走る者、提灯に火の点ぜぬ者、決勝点數歩の所に灯消えて呆然たる者など實に滑稽なり（二分五秒）

一着　黒田孝夫　二着　西村福太郎　三着　石川精一

第三回　二人三脚競爭　何れも美しく揃ふて走れり、（三十五秒）

一着　宮島宇吉　岡本寛　二着　宮城篤珍　茨木忠俊

第四回　診斷競爭　途中病名を記して秘せられたる二十余の札あり、之を拾ふて背に負ひ其疾病に固有なる三枚の症狀を散在せる百余の中より集めて走るもの、學術的競技にして大に觀衆の喝采を博せり。

一着　佐々木靜　二着　野村義雄　三着　伊藤哲一

第五回　一人一脚競爭　名の如く両脚を縛り、一つとなして飛び行くなり、甚だ不自由にて倒るゝあり、一走しては休むあり、遂に二十五秒にして

一着　志村猪藏　二着　今村文碩　三着　服部暢助

となる。

第六回　四丁競爭　距離の長きだけに一氣に走る者は長く堪ゆる者に後るゝは言はでものこと。（五十九秒）

一着　吉田宗一　二着　深谷藤市　三着　内藤隆治

第七回　武裝競爭　靴の左右を取違へて周章てふためき、背囊を倒に負ひながら、上衣を着ながら、劍を帶びながらチョコ〳〵走りにて漸く決勝線に入る。（一分十八秒）

一着　酒井謙治郎　二着　眞舘修平　三着　岡勝重

第八回　救急競爭　一人の醫士、二人の介者、一人の患者より成る競技にして第一動令により患者は出發線より全力を以て走り、第二の動令によりて倒る、これと同

時に醫士は靴を穿ち介者は擔架を擔ひて走り、豫て組合せたる患者の許に至り、醫士は豫め定めたる繃帶を施し、介者はその間に擔架を組合せ、之に患者を載せて競走するもの、これ亦學校の性質柄觀衆の歡を買ひ得たり。（三分十五秒）

一着（佐口　榮／橋爪元吉／谷道清／小黒仁太郎）

第九回　二丁競爭（二十三秒）

一着　金子義長　二着　赤祖父廉三　三着　高儀義之

第十回　獨逸作語競爭（三十二秒）

一着　山本直枝　二着　老川雪房　三着　楠本晋平

第十一回　戴籠提灯競爭　鞠躬翼如として燈を擁し去るスタイルの面白さ。（一分十五秒）

一着　淺田耕造　二着　六嘉孝光　三着　西村銀太郎

第十二回　化學分析競爭　藥學科獨特の競技にして赤、黄、青、紫、黒などの色ある被試驗物より各自に之を分析し、其反應によりて何物たるかを驗出するもの、目新しき出來榮とて中々に喝采を博したり。

一着　村垣梅市　二着　島亮二

第十三回　重荷競爭　正味八貫目の重荷を肩にしてよろめきつゝ走る、稍噴飯に價すべきもの。

一着　堀孝信　二着　多和田眞吾　三着　田中三彌

第十四回　障碍物競爭　其名に已に顯證するやう最も困難なる競爭だけ、己れ一定仕らんと腕に覺ゑある勇士の面々、斜面に、高架に、吊索横木に、攀索に勢込んで却つて身輕に働かれで失敗を重ぬるあり、大の男が小さき輪を拔けんとして困ずるあり、丸木橋に辷り落つるあり、あるひは網をもぐり脫けんとして大きなる芋虫の蜂に刺されて七轉八倒するかとばかり打もがき、容易く脫け得ぬなんどの不覺どころこそ口惜しけれ。（一分十五秒）

一着　金子義長

時正に午なり、此處にて一先づ休息し、中食とはなりぬ。午後一時、響く號砲と共に再び競爭は始まる。

第十五回　製藥競爭　言はずもかな、藥學科の競爭、日頃の御手並も表はれて感服々々。

一着　奥山義盛　二着　牛木謙吉　三着　中山富次郎

第十六回　六丁競爭（二分十秒）

一着　高儀京次　二着　副田實成　三着　赤尾肇三

第十七回二人三脚競爭（三十四秒）

一着（山田有登　二着（小暮喜一／國吉眞才）

第十八回　救急競爭（三分四十五秒）

一着（岩崎衷藏／池川周次郎／今村文碩／古屋榮治）

第十九回　一分間競爭　何處が決勝点の目的もなくドンの響を聞く迄はと緩急の手段も用ふるに由なく、皆々遮二無二先を爭ふうちに五十九秒はいつしか經過ぎて一發の號砲第一に立つは吉川氏なり。

一着　吉川　友信　二着　須賀　芳壽　三着　淺田　耕造

第二十回　旗取競爭　（一分二十秒）

一着　副田　實成　二着　高橋　義之　三着　坂谷外之助

第二十一回　診斷競爭　（一分十秒）

一着　內田　貞春　二着　池川周次郎　三着　塚崎　茂

第二十二回　制歩競爭　両脚を白布にて搏り歩を制して走る。

一着　松田　正三　二着　河村　賢吉

第二十三回　四丁競爭　（一分）

一着　吉川　友信　二着　永井　人雄　三着　本間　淳三

第二十四回　盲者受命競爭　盲競技者が命者の號令によりて錯然たる旗の間を過ぎ、途中に設けたる橋梁を渡りて地上に散在せる球を拾ふなり、柵にあたりて迷ふ者や、橋上より落つる者など、とり〳〵に面白し。

一着　〔西坂　武茂
　　〔大原米次郎

第二十五回　獨乙作語競爭　（四十四秒）

一着　吉田　圓麿

第二十六回　戴嚢提灯競爭　（一分三十五秒）

一着　岡田　秀造　二着　若槻　寛隆　三着　關川　敬次

第二十七回　化學分析競爭

一着　津川　直吉

第二十八回　重荷競爭　（五十三秒）

一着　福村　深敎　二着　赤祖父廉三　三着　弓立　儀一

第二十九回　二丁競爭　（二十五秒）

一着　吉川　友信　二着　宝田　茂人　三着　堀田　圭三

第三十回　跛者戴嚢競爭　（一分）

一着　牧　田　泰　二着　相馬甲五郎　三着　國吉　眞才

第三十一着　救急競爭　（三分三十秒）

一着　〔鈴木　啄磨
　　〔小林唯四郎
　　〔村松　貞司
　　〔城谷　隣賢

第三十二回　武裝競爭　（一分五秒）

一着　佐　藤　武　二着　今村　文碩　三着　赤　松　省

第三十三回　一哩競爭　當日の競技中最も眼ざましきものなり、二週まで後にありし廣瀨が三周にて先頭に立ち、次第に他と離れて四分時ならず決勝線に入り大に他に勝ちたり、變化少かりしため見榮えせず。（六分二十三秒）

一着　廣瀨　淵龍　二着　副田　實成　三着　大野　幸重

第三十四回　二人三脚競爭　（三十二秒）

一着（近藤一恕
　加茂智榮

第三十五回　戴嚢提灯競爭

一着　渡邊靜二着　久保田宮太郎　三着　中谷豐允

第三十六回　診斷競爭　（四十五秒）

一着　佐藤武二着　布村祥三着　小黒仁太郎

第三十七回　一人一脚競爭　（二十八秒）

一着　黒田直純二着　武者素行　三着　古屋榮治

第三十八回　障害物競爭　（一分七秒）

一着　高儀京次二着　表宣明　三着　尾崎芳壽

第三十九回　桃挪競爭　一等四十四尺　二等四十尺

一等　城谷隣賢　二等　萩野茂次郎

第四十回　市内各小學校撰手競爭　三十三間堂の佛の如く、頭を連ねて幷び、出發の際倒るゝあり、機を得て先んずる者は勝を占む、總ずるに無邪氣なる競爭なり。

一着　小將町尋常小學校生徒　某

第四十一回　來賓競爭　鹿爪らしく髯をはやし玉へる來賓の諸君が、今ばかりは小供となり嚢を頭に戴きて競爭し給ふ面白さ、チヨクでかため給へる頭髪が斯樣なきたない嚢をのせられて定めて不平をこぼしたるならん、賞品を得られざりし方々は必ずそが黒髪の結びに結びし恨のためと思し給へかし、あなかしこ。

一着　丸谷熊次郎　二着　大桑松三郎　三着　田中正一
四着　牛塚榮太郎　五着　秋山八百藏

第四十二回　職員競爭　拍手喝采の裡に初まる、我ア　とて奥の手は此の如きアと第一に決勝線に入りたまひしは金原先生、次いでは堀田圭三氏、林常雄氏、野崎芳孝氏、石川喜直先生なり。

第四十三回　各學校撰手競爭　（一分二十七秒）

一着　石川縣師範學校
二着　石川縣第二中學校
三着　石川縣立工業學校

第四十四回　高等學校撰手競爭　各級撰手競爭に次で主んぜらるゝ名譽の競爭、中原の鹿誰が手に落つるかと見てある中に三周を經て第一着を得られしは村上常太郎氏。　（一分三十二秒）

始めは處女の如く、終りは脫兎の如く走れりといへば當らずとも遠からざるべし。

第四十五回　各級撰手競爭　見る人みなまじろぎもせで手に汗を握り、各級の生徒はわが撰手よかれよと祈りつゝ競爭圈の外圍に犇々とそゞろ心に聲を作さずして立てり。

と見るうちに群集の視線を滿身に集めて各級の重き望を兩肩に荷ふ好個の撰手十二名は正に出發点に現れたり。

喊聲忽ちどゞろき、拍手雷の鳴るに似、赤、白、赤青の紙旗入り乱れて風に飜れる勇々しさよ。

やがて一發の號砲空に響き、十二人の足一時に動き、數多の頓に閃き出でしが程もなく、勇士或は先んじ或は遅れて一周を終れり、いま第一に走る人は醫四撰手山田氏、次では醫三撰手副田氏以下十人こゝを先途と疾驅するさま、むかしよく走りけん押松ありとも膽を寒うすべく思はれたり。

かくと見るや、各級の應援ます〳〵盛んに、山河も崩るゝ叫喚！呼號！

撰手はその順序を變ぜずして第三周に入り半を終る頃、疲れし躰の八万四千の毛穴より湯氣迸らんばかり、最後の精力を傾倒して競爭頓に激甚となれり、競爭は眞に激甚となれり。

今や醫四撰手吉田氏と醫三撰手金子氏とは相並んで先頭に走りつゝあり、聲援宛ら百雷の一時に轟くが如。

さはれ、この棹尾の一振！辛うじて吉田氏は金子氏に危機一髪、半歩先んじて決勝点に入れり、決勝の號砲、醫學科四年級の撰手が走力の優勝を賛稱して響きぬ、續いて起る歡喜の音聲！第四年級萬歳の聲!!

一着　吉田宗一（醫學科四年）（一分三秒）

二着　金子義長（仝　三年）（一分三秒半）

三着　副田實成（醫學科三年）（一分六秒）

四着　山田茂樹（仝　四年）（一分九秒）

五着　近藤益成（仝　一年）（一分十五秒）

かくて順を追ひ次を重ねてこゝに四十有幾回の競技全く終る、時に日は已に西山に落ちて晩鴉塒を求むるに忙はしく四顧漸く蒼然たり。

茲に、一同は運動場中央に凹形に整列し、會長代理山碕先生は音吐朗々、運動會に對する讃辭と希望とを述べられ、續いて委員長代理金子先生は例の圓轉滑脱なる口調をもて本會に對する好評を賜ひ、且つ本日は殊に委員諸君は最も熱心に無事に公平によく其任に當り、皆職務を盡すに努力せられたる大に本職の滿足する所なりと謝せられ、后、在青森前教授松浦、在仙臺仝湯目両先生よりの祝電を朗讀せらる。左に

陸上運動會成立開催ヲ祝シ且會員ノ健康ヲ祈ル　松浦

運動會ヲ祝ス　湯目

（昨年我が校を去り給ひし両先生の御厚志、謝するに辭なし、殊に両先生ば夙に運動會開催派なる生等に加擔して多大の便を與へられ、今日の盛會を見る實に両先生の賜物によること少からず、而かも今や両先生は遠隔の地に在し給ひて光榮ある盛會に臨まれず、遠く祝電を寄せらる、両先生の御心中や如何に生等懷舊の情に堪えず、端坐襟を正うして遙かに鴻恩ある両恩師を思ひ、且つ敬意を表す）

山碕先生更に金子先生に代りて再び高壇に立ち、

天皇陛下萬歲　金澤醫學專門學校陸上運動會萬歲を三唱せられ一同之に和す。聲、北陸の天地を震動せしめて勇壯凛烈、譬へんに物なし。忽ち見る、平和歡樂の神は徐ろに降臨し一掃以て殺伐紛乱の禍害を斷つを。散會す、時正に六時。

附記

幾度か起らんとして會場のために揉み潰され、兎角の世評を蒙りし我が春季陸上運動會も漸く其氣運到來して、會員諸君の奔馬の如き熱誠により、今春めでたくろの第一回を開き得たり。半千に餘れる我校の健兒、固より數多き中には十人十色ありて一部の小不平より一頓挫を招きたりしも、我校運動會内幕に就ては世人の氣遣ひし如き葛藤のあらざりしや勿論なり、夫の三月廿七日本校に於て開かれたる委員會滿場一致の運動會成立可決は、實に無根の說を流布して世人を欺きたる某紙の妄評を打破するに足り、我會のために悲しむべき誤解を招かしめたる臭劣漢を責むること切。同時に余輩は熱心に將に〳〵立ち消えんとせる我が運動會を盛り返して遂に實行せしめられたる諸教授幷に委員諸氏の盡力を多謝す。

# ○彌次日記

庭球彌次生

四月二十九日　ごとん、しちん、ごとん、しちん、是れは余等三十餘名と四高の南下隊の勇士二百名餘が乘せられた列車の手取川鐵橋を渡る時の音である、今まで普通の目になれた田舍の春景色であつたが橋を渡てから視界が一變して右手の沙丘は一面に小松原で其の松が北風に練れた樣は舞子あたりの其れと大へに趣を異にして居る前者二八の娘が御座興に舞てる樣で後者は鎌髭の武者が出陣の祝に舞てる樣である、車が進むにつれて亭や東屋の骨のみで立ち居るのが何となく哀れで春の樣な心がしない、茲は小舞子と云ふて海水浴場夏期設けられる車は松林を縫ふて進む左手に白山が白帽を被て（日が横から輝るものだから）松の間から覗て居る、福井に近づくに從ひ松が少なくなる城跡藤島を望むに至て旅心地が定まつた、視界は平凡になつて余が旅情を慰むるにたらない雜誌を取り出した、暫くするとうす暗くなる、視線を窓へ向けると列車は山の峽を通て居る、谷間には雪がある其の雪の上に椿が散て居るよく見ると地面にも散て居る全体雪の上に散て居るのと地上に散て居るのと何れか幸福であるか、總じて雪の上に花が散るなぞは自然でない、然し其の中にいも云はれない調和が存して居る、何んて

考へてる間に列車は進で振りかへると山の陰になつて椿はもー見へない、敦賀近くなると列車はトンネルへ入つたり出たりする目の下に入江が見へる日露の外交官が入江の解釋に苦んだと思ふと、此の入江も一段と入江振りを昇げた樣である、茲で一寸後日の爲め書殘して置きたい事かある、どーせ彌次日記順序もくそもあるものか思ひ出した時書てのけるまでのこと

拜啓餘寒強しとは申し乍ら春光は既に都の空に遍ねく芳草萌ゆる御校運動場裡には熱心なる運動家諸君を以て滿され候事と奉存候

今回裏日本なる小生等より一書を座右に呈するは余の儀に無之即ち當校運動部中の庭球部がラッケットを杖に年來の宿志を越路の霞と共に立ちて三十六の峯蒼き舊都の春を賞しがてら難波潟住吉わたり一遠征の議こゝに一決仕りさてこそ突然にも貴意の程御伺い申すにて候

御承知の如く北陸の地は寔に不幸なる氣候と地勢とに影響せられ文明の光にも遲れて接觸致すやう存ぜられ候へば學術界のみならず自然運動界の大勢にも遠かり候て只新紙の報導により東西斯界の活動を夢み羨望禁ぜざる許りに有之候

かゝる事情の下本校の運動設備は極めて不完全に從て競技者の技倆怪しげなるものに候事は改めて申上ぐるまでも無之候

さはれ當代の健兒が空しく邊隣の小天地に朽ち果てむ事餘りに本意なく且は又關西の斯界に名聲藉甚なる御校撰手諸君とコート上に相見ゆるの喜悅と榮とは拙技を以て酬ゆる以外眠れる如き北陸斯道の覺醒を隨伴すべく多大の希望を屬し居り候

況むや御校とは同一學究の輩に候へば秀拔なる運動技術の指導を受くるに止まらず此の動機によりて兩校の接近調和を謀り候はゞ運動家も非運動家も諸君によりて發展向上の途に進む可きは明らかなる事實と存ぜられ候

先は日夕敬愛せる御校撰手諸君の前に謹で高敎を仰ぐべく蕪辭を連ね併て御鳳聲を待入候敬具

こー云ふ排戰狀を庭球部委員より出された幸に大坂高等醫學校も京都醫學專門學校も快諾を與へたので今度出發する事になつた撰手の面々は左の十五名の諸君で外に彌次二十人ばかり、

濱　鉄造　望月貫一　服部暢助
岡　久雄　北村仲兒　多和野眞吾
今井篤　小暮喜一　數見宗一郎
小林進　武者素行　赤祖父廉三

高保二　金子義長　井口爲四郎
（順序不同）

柳瀬のトンネルを過ぎてから桑畑の中を過ぎた、誰やらが縮緬が木から顔を出して居ると云ふた、なぜかと問ふと桑の葉が虫の爲に糸になり糸が縮緬になる三段論法によると桑の葉が縮緬になるから桑の葉が芽を出して居ると云ふ事だろうな進行中の列車の様な閑な處ではこー云ふ事で時を過すに限る

長濱を過ぎてから湖が見へる昔しの人は近江の海と云ふたげなる程海ほどある、一体定義なるものは一定不變のものであるはずである、然るに昔しの海は今の湖となつた、何百年の後は何と名が變るやら、石山も勢多も遠いながらも三井も唐崎も瀛車窓から見た、近江八景なぞは平安朝時代のへなへな公卿に適し居るが明治子の吾々にはより壯大なる風景を要する、京都へ着たのが燈を点ける頃であつた、京都は懐しい都である、自分は中學の一二年は茲で修めた、寺町の丸太町で電車を降りて、吉田の旭館へ入つた、

三十日五月一日の両日は撰手は練習に吾々は市中の名所を尋ねまわりしのみで發表する價値がない、二日の午前大坂へ出發した、

三日　車の音が聞へる、ろつと眼を開いて見ると雨戸のすき間から長閑な光がもれて居る、今日は天氣である、あちらでもこちらでも氣笛の聲がする、時針を見ると五時十分起るに少々早い蒲團をかむる中々睡られない、すると隣りの室に人のけはいがする、撰手の人が起たそうな、撰手が起きる吾々彌次が臥し居るのもなんとやら、起るとする、丁度体温と調和した床を離れるのが頗るつらい、

今日は神武天皇祭である國旗が軒に閃いて居るであらうと思ふ其國旗が丁度吾が撰手のかどでを祝して居るのである、

こう自分できめると國旗も彌次の仲間の様な氣持がする何となく懐しく一寸見たい氣がする、蒲團を蹴て窓をあける朝風が吹きこむ、新らしき仲間を吹いて來たと思ふと風も暖い様である、彼れ是れする内皆起きて出る、顔を洗ふめしを食ふ、宿が狹いので大混雜、

八時半大坂高醫の校庭の人となつた、コートは灰色むしろ黒色で繃帶でラインが引てある黒い處へ白いライン目が眩める様だ、両方撰手がミックスで練習が始まる新しき眞白なボールが黒の地白きラインニ映じて壯嚴に見へる、コートの周圍には人垣が築かれてある、若し此の人垣がなかつたなら壯嚴の幾分が必ず害せられずには止まらない、何となればコートは幅十二三間長サ二十間位の

其の二方はあまり上等でない民家のしかも裏で境せられた空地にある、其のかわりボールの音がよく反響して非常に響く此の響きは此の日の試合に大なる景氣をつけた暫く打合間にボールはだんだん保護色を帶んで來た、即ち黑色の地に接息する爲め煤烟が色着つげた、大坂の霞は灰色ある煤烟の爲め、やよ大坂、マンチエスターを凌げ、

十時審判官によりレデーが命ぜられた、場内は水を打た樣に靜かになつた、突然靜寂を破つて整然一糸乱れない聲援が始まつた、

此の聲援で敵方の撰手の目は希望を以て輝いた味方の撰手の顔には或種の表情があつた此の表情は今日試合に大なる影響を與へたらしい、

諸君此の瞬間に於ける彌次の心中を察してくれ給へ、撰手は腕にたのむ處がある吾々彌次は只聲と目あるのみ吾々は聲の練習を積んでない、而して其の聲は聲援にはあまり少さくある、彌次はたつた三人のみてある衆寡敵せず沈默せざるを得ない、只目あるのみ、其の目さい興奮した撰手の後援には甚だ薄弱である只六つの目あるのみ（京都までは彌次は多かつたが京に止るもの奈良へ行くもの須磨明石へ見物に行つたから僅三人となつた）

プレイーが宣せられた

味方は赤祖父組先づ陣頭に立つ氏の獰猛と前衛井口氏の輕快とは我校の先降としては適任である、敵の鈴木組は雄を京坂に稱ふるもの、火花を散して戰ふた、赤祖父氏平常の如く振わなかつた岡組が新進の悲しさあせり氣味で敵をして優退せしめた、次ぎに我副將小林、高組敵の岸上組を破りその勢に乘じ牧野組にせまる此の戰ひ中高氏敵の前衛安井氏とスマッシングの打合ひをなして花々しき活劇を演ぜしも小林氏意氣揚らず敗れたり時既に正午、暫時休息し午後一時より開戰されぬ多和田組小暮組北村組首をつらねて討死し遂ひに我が校主將の金子武者組陣頭に現はる敵は新鋭組石津高木の兩氏出で、邊ふ後衛金子氏の猛烈なるサーブと相待つて前衛武者氏の輕快なるチットプンーの鋒先鋭く先づ二點を得石津組は頗る危かりしが前衛高木氏此の一擧にありと得意のスマッシングをなし石波氏亦バックの熱球を以て之れに應じて閃光閃發交々來り奮闘して遂に敵は我れを破りぬ、

鈴木、天野四—零赤祖父、井口

◎同　四—零岡、今井

岸上、青山一—四小林、高

牧野、安井四—三同

◎同　四—一多和田、數見

熊谷、上野四—零小暮、濱

◎同　四－一北村、服部
石津、高木四－三金子、武者
松村、吉田
吉川、大野

試合が終つた樓上に於て茶話會が開かれた両方の撰手が胸襟を開いて談つた此の會合は我か撰手を益する事少なくなかつた樣である我校敎授金子博士も臨席された吾々は非常に喜ばしくあつた両校撰手に對して懇篤なる先生の演說があつた、

總じて我撰手は年の若いと共に技も若い、ねばりがたらぬ、場處なれしないものだからあせる、從て平常の技を發起するに由ない、敵のバックは美事である、

朝風に元氣よく飜て居る國旗は夕凪のためであらうが活氣なく凋れて居る肥後橋は架けかい中である、橋の架けかい後年の思出には好き記念である、假橋を渡る、

夕日は斜に水面を照して居る、黃金の波が岸にせまる考へるともなく兼六公園霞か池を思ひだした同じ夕陽がやつぱり池の面を照して居るであらう、地畔を散步する角帽が目にちらつく、

悚然佇立したメスメリズムを施されたるが如く、

あゝ我が親愛なる同窓の友は鶴首勝報の至るを待て居るであらう、

撰手は自己のベストを盡して戰ふた吾々彌次戰はずして破れた數に於て破れた、こゝ云ふ事と知たなら全校の彌次を引つぱつて來るのであつた、

宿へ着いた宿は橋から一二丁ある、

室は陰氣でうす暗い、暫くすると二三年會なかつた友人が尋て來た、

以下は發表する限でない

十時頃歸る床が延べてある東山はあちらにもこちらにも見へる、隣室に聲がする明日の戰鬪に關する參謀會議らしい、話しが近くなつたり遠くなつたりする自分は睡入りつゝあるのでる、

四日　試合は午後からである撰手は高醫のコートへ練習に行く、自分は風呂へ入つてから手紙を書いた、手紙は日光を帶びて椽先で書いた、室內は陰氣で寒いからである、春はまだ淺い、書く內に紙が跳り出した、敗軍の將が兵を談ずるから紙がおかしくなつたのであらう、

硯で直ちに鎭撫した、

今度は太陽が惡戲を始める、明るくしたり暗くしたり、目をあげて見ると、灰綠色の葉の幹の黑い松が左右に運動して居る、此運動が明暗に關係して居る、とんだ處でイチルギーの不滅を思ひ出す、さつきから風が吹て居る、

書き終る、

撰手がまだ歸らぬ、腹がへる暫くすると午砲がなる、めしを食へとて下女がくる、撰手はどーしたと問ふ高醫で中食を食ふのだと、

約十分間歩るいた後高商へ着いた途中三つの可成大きな橋を渡る、大坂は橋の都である、

一時試合が始まる高商出身の某氏によりプレーが宣せられたコートは背景の具合で短い様な氣がした、コートの周圍には人垣が築かれた事は昨日の通りであるが人の種類が異つて居る前垂角帶が三割位ある其の三割は特に光彩を放つて居る、

戰は始まつた三人の彌次は大へに彌次るべく準備した、突然一團の喜太公が彌次を助けてくれた喜太公は高醫の諸君の事である、昨日の敵は今日の味方となつた、

森德組は敵の副將赤祖父組の惡戰苦鬪功なく次で北村組破れ敵をして優退せしむ、金子組苦もなく敵の大谷組吉田組を破る今井組金石組と決戰し利あらず小暮組現る氏のローピング功を奏し金石組を破り敵の大將林組を襲ふ敵の後衛林はミスの少なきを以て有名なるもの之れに反し前衛柏岡氏失策多く辛じて小暮組を破り陣を引く次で望月組と戰ふ此戰爭に於ても敵前衛に失策多く敵主將は危機一髪を以て優退す小林組出で山祥組林與組を破る、今まで秩序なき聲援をして居た敵は一聲に校歌を唱ふた彌次も喜太も沈默した味方の撰手の顏に所謂或種の表情があつた、

我が大將組は敵の副將組と戰ふた、

時なるかな朝からの風が一層暴力を增した、太陽は斜に撰手の顏を照して居る我が撰手は兩人共に眼鏡を用ひて居る、さぞまぶしいであらう、風が飛ばす煤烟と砂とは眼鏡を曇らせはしなかろうか、心配な事である、

拍手に迎へられて金子組森德組と戰ふ敵は盛に校歌を唱ふて聲援す森德氏の老熟なる守備關岡氏の輕妙なるチッフレーは金子氏の堅實なる打方と武者氏の痛快なるモーションと相待て當日の花であつた次で小林組出で大に苦戰せしも殘念なから彼等に名をなさしめた月桂冠を彼等高商の有に歸した、

今日の試合で各撰手は大に仕合になれて來た樣に思はれた自己の得意なる技を確かに表はしたコートは高醫の其れに比し惡しくラインも明白でなかつた爲め見物人をして審判官の神聖を呼ばしめたチットが一方に偏して張れてあつた是れも作戰の一つと見たがひが目か、だんだん兩方の聲援がはげしくなつた時敵の聲援者の或者は我撰手の人身攻擊をするものさい生じた吾々彌次は其の聲を彼等の愛鄉心愛校心の反響であると思ふと却て親しくなづかしく感じた我撰手も同感であつたらう淸き微笑を以

て聞きなかして居た、

杏德、關岡四—零赤祖父、井口

◎仝　四—一北村、服部

大谷、石原零—四金子、武者

吉田、木田一—四◎仝

金石、丸尾四—二岡、今井

仝　三—四小暮、數見

林、柏岡四—二仝

◎仝　四—一望月、濱

山祥、村上一—四小林、高

森與、鐵岡三—四◎仝

森德、關岡四—三金子、武者

◎仝　四—二小林、高

茶話會か開かれた會は乾燥して居る粘着力がない淡々水の如し。

夕陽に色取りせられた白色の凱旋門を横目に瞋んで橋を渡るなんだか眞正面に門を見るのが、羞しい。プップーと巡航船の瀛笛が人を小馬鹿にした様になる一度ならず二度三度、プップーが非常にしやくにさわる、二三年前に車夫が騒動を起したのも此の聲を聞たのが近因だげな、

宿へ歸てからすぐ一同は京都へ出發する自分は少々用事があるので一瀛車後れた。

九時の列車で京都へ立つ、此の列車は急行である普通の賃錢の他に急行賃を取られた、世は文明になつた、時は是れ金、

吉田の宿へ着た先發の撰手がやつと着した處であつた、なる程金は是れ時である、

今夜は急に客が增したので夜具がたらない、夏目さんじやないが京都は寒き京である、殊に夜は寒い、

五日　そつと目を半開にして見ると障子を通して來る光はぼんやりとして居る、春雨が降て居るのではあるまいか、春雨は音も立てずに降るのが特徴である、何んぼ草木の花の父母でも今日は眞平だ、そんな風流な事を云て居られない、十時から試合が大學のコートに於てあるはず、然し雨とは思へない、昨夜停車場から來る時星が輝て居た、障子に旭が照て居ない、日本晴でもない、そこで花曇りであると合点する、

花曇りであると思ふと氣がのんびりとする思はず背のびをする、延ばした手が枕もとの火鉢を推した、鉄瓶がかたかる、景氣よく神樂灰が昇つた、

一体背のびは誰れでもうつむきてするものはない、自分の目も天井を見て居た、神樂灰が昇ると共に反射的に目を閉した、モーションの早き事大坂高商の關岡氏も三舍

をさけるであらう、目を開いた、空に知られぬ雪が降つて、そばにあつた黒の洋服は霜降にかわて居た、誰れやらが窓の障子を開て居る、四段目の由良之助だ、それでも開けないに優る、御影で天候を確かめる事が出來た、案にたがわず花曇りである、花の蕾の中から來る暖き薫風が七分に清涼な比叡颪が三分で調合された京都獨特の春風が輕く顔を洗いくれる、

黒谷の塔は紫に霞で吉田神社の赤き鳥居が松の並木中に夢の樣に見へる、

由良之助が霜降りになつた服をばたばた掃ふ灰が飛んでまるで鷺の樣である、若水をくむ車井の音鶴の聲と聞へた、

灰神樂、鶴の聲前徴がよい、

十時半試合が審判官は美術學校の三吉氏により開戰が命ぜられた、今日は三高庭に四高對三高の庭球の試合があるので見物人も聲援者も至つて少ない、來て居る者は一粒撰りであるから靜寂で、多くの試合で見る厭ふべき混雜がない、

平出組は小林組望月組を破つて優退す失禮ながらけがの功名らしい、小幕組杉本組を破る續く佐野組の後衞大前氏自暴自棄の擧動あり非常に見苦しかつた、岡組破竹の勢を以て武田組由利組を破り赤祖父組多和組は溝上組に名をなさしめた、兩軍共に優退二組、茲に於て兩方の大將出馬す今日の勝敗は此の一戰により決す金子氏の睥睨する荒鷲の如く黒住氏の美事なる鬚と躰格は恰然ものなれし勇士の陣頭に立つが如し武者氏の敏捷なるモーションと藤森氏の沈着なるモーションは好きコントラスである黒住氏の球は獰猛であるが變化に乏しい美事武者氏の功に歸した金子氏の砂を噛む痛快なるサーブは着々功を奏し味方の勝となつた、優退組の決戰が始つた小幕組奮勵一番半出組溝上組を破り岡組金子組を殘し勝利は我に歸した吾々は勝つた惡しき心地がしない、

平出、池田四—二小林、高
仝　四—零望月、服部
杉本、奥野一—四小幕、北村
佐野、大前零—四仝
武田、橋本三—四岡、今井
由利、市川一—四仝
溝上、岩動四—一赤祖父、井口
仝　四—零多和田、數見
黒住、藤森一—四金子、武者
平出、池田二—四小幕、北村
溝上、岩動一—四仝

茶話會が旭館の食堂で開かれた先づ兩校の萬歳を祝し兩

校撰手の万歳を祝し快談數時間に及び親しきむつまじき會合が終つた、

吾々が豫想した愉快なる勝利の夕を現實した樂しき雜談して思ひ出でたき夕を過した、

六日　朝起き窓をあけて見たに昨日までの春空も今日は雨天となつて何んとなく物凄き空であつた撰手吾々彌次は雨天を幸に洛陽の見物と出かけた別に記すべき事なし

七日　午前七時半發の列車にて撰手及彌次隊其外四高南下隊無慮數百名のものが洛陽をあとに尾山城下に向つて去つた道中の記事としては既に述べたるなれは畧す午後五時半頃ピーの聲にて吾々は金澤に着いた、

彌次責任は終りを告げた、茲に金子教授大坂高醫、大坂高商、京都醫學專門學校三校撰手諸氏大學生笹岡恭平氏大坂高醫學生今井潔氏の撰手のみならず吾々彌次にまでつくされし好意と歓待を深く謝して筆をとめる、

○下平教授の近信　來春まで左の所に滯在研學せらるべく此程田中一次郎氏へ宛て通報ありたりと

Prof. Dr. Shimodaira,
Gütenbergstr. 15III,
Bern,
Schweiz.

編輯上の都合により漫錄欄（二雨會例會記、全詠草、全句集）會報欄（特別會員動靜、運動會余興、短評、講話大會記、醫學科四年級撰手慰勞會、醫學科三年級々會記）などの記事次號に記載することゝなりぬ、會員諸君幸に諒之焉。

＊　＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊　＊　＊

## 通信

○飯森益太郎君通信（九月十日ウルツブルヒ發宮田教授宛）

飯森君本月二日無事歸朝セラレタリ然レ𪜈興味多キ彼地ヨリノ通信今之ヲ割愛スルニ忍ヒズ此處ニ掲載ス（編者）

### ◎民賢雜觀（四）

▲留學生に必要なるは下宿の撰擇である語學の進歩は一に懸りて下宿の良否に存すと云へばチト大袈裟なれど兎角善良なる家庭へ入り込むは語學練習上の秘決だ日本人と同居するは一大禁物たる事を忘るべからず

▲下宿屋は市内到る處に澤山ある Zimmer zu vermieten と云ふ札は所々にふら下て居る價格は場所と階數に依て多少の差異あるは勿論だが Möbel 附（シユライブチッシ

ユ、テーブル椅子四脚、ソーファ、シユランク、ワッシユチイシユ、ナハトチイシユ）で月二十五麻克－四十麻克位だ尤も上等の處では書室と寢室とが別々にある處もあるか我々には少しく贅澤過きる一寸注意すべきは若し轉宿せんとする時は一ヶ月前に通知して置かねば假令一日居ても一ヶ月の全額を支拂ねはならぬか慣習に成て居る

▲獨乙の家屋は一軒の建物か大抵十間四方て三、四階建である（當地ては下層を「パルテー」と云ひ日本の所謂二階に當る處を一階と云ふだから獨乙の三階と云へは日本の四階になる譯だ）中央に入口かあつて迂曲した階段で漸次上層に達する事を得各階の左右には各借屋人の入口が有つて大抵四五の室を持て居る精しく云へば一構の建物は六－八個の貸屋よりなり三十－四十の室を有する勘定である價格は下層最も高く上層に至るに從て安い最上層の「ダハチンマー」の如きは貧乏人の居る處であるだから三階四階に住て居ると云へば餘り幅がきかない譯だ

▲建物は皆煉瓦或は石造で地下五六尺の處より積上るから地下にも Parkett と稱する一室かある大抵は仕事場に成て居て光線は厚き硝子窓にて軒下より取て有る姿で夜見た時には足の下が明くて一寸驚いた

▲獨乙人の性質は各地方に依て多少異にして居るが歐州人の特性として能く忍ひ能く勉め能く守り能く節する事は日本人の及はぬ處である彼等は一事に熱中するときは幾多の蹉跌あるも俄かに素志を變するか如き事はない約束を守り時間を利用するは今更余か喋々を要せさる處浪費を節する工合なとは我々の眼孔よりすれば多少吝に見ゆるが決してうではない一家族内と雖も既に自立し得るものは悉く經濟を別にし貸借其責を明にし毫も侵す事なきは一種の美風と云ふべしだ

▲遊民の少なきは豫想外てある中流以下の者は十五才に達すれば男子は勿論の事女子と雖も其分に應して必ず職業を求むる殊に女子就職の途は種々の方面に柘かれて居る官吏教員書記店員種々なる工場乃至はケルチリンに至る迄到る處ま女子の用途がある數十年以來女子の跋扈は男子職業界に大なる恐慌を來せり斯の如くにして生存競爭は男女の間に及ぼし汲々乎として獨立自營の途を得んとする狀況は日本女子の到底及ぶべからざる處とす

▲生活の程度は歐洲列國中高からさるが如し而かも日本に比して數倍の上にあり小學教員巡査店員にして月收八十麻克以下なるはなく十四五才の小女優に三四十麻克を得從て生活に對する費用も日本に比して遙に大なりと雖も能く勤儉を保持し浪費を誡しむるの美風は到る處に發揮せられて居る近來經濟學者の報する處に因れば獨乙に於ける富の程度は日本に比して四、三二倍なりと云ふ世

の中は何ても金と力なり此点より論すれば日本は或意味に於て色男子たるの資格充分なりと云ふべき乎呵々

▲獨人か一方に於て職業に忠實なる代りに他方面に於ては非常に遊び好きなる事は前回已に報せし處なり去れば日曜祭日の如きは一家悉く業を休み總ての賣店は全く閉鎖せられ只「レストラン」と劇場のみ開かれて居る金なき者は公園或は近郊に出て浩然の氣を養ひ金ある者は瀧車を利用して遠征を試む其盛なる事都下五十万の屋内一の人影を認めすと云ふも過言に非らざるべし

▲一般國民の体格は思ふたよりは大きくはない中にはステキに高い奴もあれとも低き者も澤山ある云はゞ大小の差は日本より甚しい余の如きは先づ中等だそこらの矮軀者流大に意を強して可なりとても云ふべき乎

▲獨乙婦人の性格が日本婦人と大に異なるは已に世人の知る處なり彼等の活潑無遠慮マケヌ氣等凡ての点に於て男子に酷似せり海棠の雨に惱むか如しと云ふ嬌態は獨乙婦人に皆無なり云はゞ蛮的轉婆にして仕末にれへさるの黨或人は敎育ある日本藝者の如しと云へり男子を翻弄するに巧なる蓋し當らすと雖も遠きに非らざるべし

▲婦人の交際場裡に於ける勢力は米國や英國に於けるが如く甚しからずと雖も又蔑るへからさるが如し六尺の男子當に彼等の爲めに願使せられ女の欲する處唯々之れ從ひ敬順敬意一に其愛を失はさらん事を恐るゝの狀は日本に於て見られぬ圖なり

▲人口に於ける男女の比例は女子に於て〇、五割方多し然れば少なくも二三十万の女性は配偶者を得る能はずして一生を終はらさるべからず宜なるかな未婚者の多きよ六七十のれ婆さんにして「フロイライン」と稱する敢て怪しむに足らず

▲一体獨乙婦人に未婚者の多き事は以上の理由のみてはない結婚するには必ず持參金を要するからだ（二万馬乃至二千馬位なりと云ふ）金のない者は何程迄も寡婦暮をせねはならぬ社會の裏面に淫風の盛なる事及女子に自立心ある事は全く之れに基くとの話だ一利一害は數の免れさる處とは云へ今更の如く其感を深くした

▲婦人の結婚年齡は二十才より二十五才の間である日本では二十才以上の未婚者は人より少し變に考へらるゝか獨乙ては三十才に成てるも一向變でない

▲夫婦否男女間の愛情の濃厚なるは大に羨むべしだ彼等ハ一寸外出するにも両々相携へ大道を濶歩する樣は余輩「ストローウィットウエ」をして垂涎三千丈たらしむ

▲此間留學生の食卓會議に於て獨乙婦人の貞操と云ふ事に就て大議論があつたが其終局は適當の解結を見すして止んだ兎に角之れは『不可解』の大疑問だろうて

▲獨乙人の服裝は一般に節素である倫敦や巴里の如き華奢の風は決してない日曜には婦女子が大にメカシ込で出掛るが目を驚かす樣な美服を纏て居る者は少ない但し其潔癖なるには感心すべした只欠点とも見るべきは彼等の袴（Volant）の長き事である盛裝の場合には二三尺、平服でも靴の見ゆさる位を程度として地上を引づつて居る不潔の所は日本の左褄と云ふ樣な工合に左手で引上けて居るか其緣は屢々地上に達し泥土を附着して居る入込の際は其褄（スソ）を蹈んでトンダた目玉を頂載する事がある

▲婦人の帽子は日本婦人の櫛簪の如く一の裝飾である帽は二本の「フートナーデル」に依て結髮に固定せられ其形や飾は流行を追て時々變化する「レストラ」劇場教會内でも之れを脫する事なくツンと濟して居る

▲西洋の女は容貌よりは寧ろ姿勢と云ふ事に全力を盡して居る鳩の如き突張りたる胸蜂の如き細腰臼の如き臀は彼等の理想的「ハルツング」である之れが爲めに人工的又種々の矯正器を應用する事は支那婦人の足と一般だ

▲小供の無邪氣にして活潑なる事は日本の小供の遠く及はさる處である之れは家庭教育の發達して居る關係だろうと思ふ彼等は如何なる人に對しても恐るゝと云ふ事少なく又啼泣する度合が非常に少ない若し事に依りて泣く場合があつても直くに泣き止むから感心だ小兒科病院の如きは一室に一—三才位迄の小兒が二十人許り小さきベツトに因て配置せられ一人の看護婦が之れを保護して居るのみて家人は一週二回の面會日に來るのみである然るに彼等の多くは皆ニコ〳〵として笑み一人の啼泣せる者を見ない尤も當地は人工營養か盛であるから自然母子間の愛情か薄きとは云へ平素の慣習に依りてコーモ溫順になり得へき乎と大に感じた

▲猶一例を揭くれば余が下宿の「ウイリウ」と稱する八才なる獨息子此夏期に民賢を去る二十里許りの處へ避暑せしが田舍の旅館に獨居自適して毫も淋かる樣な事がない母は一週一回宛見舞のみである之れ獨り「ウイリウ」のみでなく此位の年頃の小供は澤山同一の方法にて避暑して居る是等は迚も日本の小供の擬ねられぬ處である

▲又小供の無遠慮なる適例は余等他國人に對しても途上屢々郵便切手を強請し時間なとを問ふ事である彼等は一般に小兒時代より憶面なき精神に富て居る

▲獨乙は學術に熱心なる處丈學者の多きは余の言を俟たすして明てあるドクトルにして小學校教員たる者は珍しくない甚しきは鍛冶屋の「フイロソフイ」散髮屋の「ドクトル、ユリスト」なと往々として聞く處獨乙現在の人口中男子を三千万と假定すれば千人ニ付四人半は大學卒業者である本年夏「ゼメスター」の大學在籍者を揭くれは左の

如し

| | | | |
|---|---|---|---|
| Berlin | 7626 | München | 3734 |
| Lepzig | 4147 | Bonn | 3275 |
| Freiburg | 2350 | Halle | 2128 |
| Göttingen | 1925 | Heidelberg | 1922 |
| Breslau | 1920 | Marburg | 1717 |
| Tiebingen | 1710 | Munster | 1454 |
| Strassburg | 1418 | Jena | 1362 |
| Würzburg | 1360 | Giessen | 1118 |
| Königsburg | 1090 | Erlangen | 1067 |
| Greifswald | 890 | Kiel | 764 |
| Rostock | 661 | | |

總計二十一校四万四千九百九十六人內醫學生六千六百八十三人なり男子二千万以上を有する日本に大學か三つとは情ない次第である

▲獨乙の巡査は勤務上の事日本と異た事はない様だ例の嚴しき劍附の獨乙帽フロッコート形青地二重釦の制服流行の「カイザーバルト」と云ふ態度は中々立派た俸給は七十一百麻矢張隔日勤務だそうだ

▲巡査の應揚にして「コセ」附かざる点は日本と餘程違てゐる一般人民に對しても敬稱を用ひ決してコラ〳〵的ではない些少の犯罪は見て見ざるか如く喧嘩口論（極めて少ないが）の場合ても遠くで監視するのみて中々出て來ない外觀上頗る親切に見ゆる

▲併し金に目のないには驚く〳〵した彼等は月俸以上の収入を得る事は珍くない夜中道を問へば二三町も附て來る一種の態度は人をして多少の「ダンクグルト」を出さねはならぬ様になるから「ウカ」と道を問ふ事も出來なら

▲日本の如き派出所はない大抵辻々に立て居るのみである十二時后の巡廻は二人宛歩くが通常である殊に異様に感するのは夜中など少し身分よき人には「グーテンアベント」と敬禮をやらかすのである

▲郵便の制度も日本と大差なきが如しと雖も集配人は悠々として一向に急かない一個人の受持區域は甚だ狹きが如く各戸には必す受取函を出してあるから『郵便』などゝ大聲に叫ふ事はない余輩他國人には本國より多く手紙の來た時には御丁寧にも室內までやつて來る是は無論酒代をせしめる手段だ

▲集配の時間は繁華の處は晝夜二十一回てあるか田舍へ行けばタッタ五回に過きない日曜日は朝一回しか配達せぬ郵稅は手紙十文端書五文外國行は倍額てある獨乙國內ても「プロイセン」と「バイエルン」とは其切手を異するから甲地に於て乙地の切手は用ゆる事か出來ない

▲繪端書の流行は非常に盛てある其趣向や印刷の鮮明な

る等は日本の遠く及ざる處景物や人物や意趣書等の中に進歩した者もある裸美人や多少怪しき繪書と雖も差支なく公行せられて居る「はかき」の表面は其半分を割りて音信を認める處かある是れは繪書を傷けざる便法だ日本でも本年の万國郵便會議てコー云ふ風にするとの事だ

▲汚い話たが便所の事を少し書て見よう便所に就ては隨分赤毛布の奇談かある獨乙で「便所は何處ですか」と問ふのか多少不敬てあるからだ「ビール」を澤山呑む人には豫め便所の所在を認めて置くのは一の要件です

▲「レストラン」や公會の場所には便所を示すに只Herren及び Damen と書してある其他 Toilet 或は Closet なと記してある處もある病院の如き數多の室を有する處には0號か小便所00號か大便所になつて居る或る所には單にAusgang としてある之れは便所を問ふに „Wo ist Ausgang" と云ふ洒落語から來たと云ふ話だ其他便所へ行く事を „Ich gehe zur Tante" なと云ふ言ひ現しもある

▲市内の辻便所には通常 Abort, Abtritt, Pissoir なとの看板が出て居る上等の處には五―十文の排泄料を要する便所の構造に就ては獨乙人も餘程苦心したと見える併し完全なる者はない最も多きは壁より漏斗狀の陶器製受便器が突出し上方より不斷水が流て居るのだ又所に依りては壁の下半部を陶器張とし床壁の隅角に溝を設け上方より簾の如く水を流してある處もある

▲大便所の方は直徑二尺斗の曲折した隨圓形の受便器にして傍にある引手を引けば所要の水量が湧出し不潔物を洗ひ去る樣に成て居る拭紙は下等の處は新聞紙を用ひ上等の處は Toiletpapier と云ふ薄き光澤ある卷紙を備へてある便所の戸には一々錠を具へ人か居らねば Frei 人かはいつて居るときは Besitz と云ふ文字か自然に現る樣に成て居る

▲便所の構造には何處ても極めて注意し壁及床は大抵陶器の「プラスタ」を以て敷詰め贅澤の處には煖爐迄据付てある病院の便所の如きは稍もすれば手術場より清潔と云ふても差支なき位だ

▲市内の便所は日本の如く澤山はないが構造は立派である時としては地下に設けてある處もある不精者やアワテ者の爲めに „Man bittet den Abort rein zuhalten." 或は „Diser Raum wird dem Schutze des Publikums empfohlen." 又は „Man muss vor dem Ausgang die Kleider in Ordnung bringen." なと掲示してある

▲途中便所のなき所て俄かに便意を催すときは「レストラン」へ入り呑みたくもなき「リモナーデ」や「ビール」を求めて用を達るのてある婦人は屢々藥店にて僅の者を買ひ一寸便所を拜借と云ふのが慣習だそうです

# ○英佛唖旅行

在民賢界外隱士

▲時は明治三十九年、春まだ寒き三月十二日、嘗て渡歐の際同船せし、近藤醫學博士が見物の爲め民賢へ着せられた、何はなくとも日本食の御馳走をとて、牛肉のすき燒、即席の切漬に米飯と云ふ献立、日本では車夫馬丁の常食に均しけれとも日々洋食のみにあきたる身は時に取て山海の珍味、博士は舌嘗すりて曰く『僕は是から來因地方を經て巴里に出て英京をも見物し「ドーバー」より船に乘り米國へ行かふと思ふが、彌次郎平斗では膝栗毛も芝居に成らす一所に來たらドーダ』との御託、時恰も「フエリエン」中故、得たり賢し、機遇すへからすと余は喜多八の重任を負て檜木舞臺に立つ事とした。

▲博士は民賢に止る事一週餘、日々東奔西走所々を見物せられた、余は此間に旅裝を整へ「センケル」商會にて民賢—巴里—倫敦—伯林—民賢と云ふ順序の「ルンドライゼ」二等切符を二百三麻克にて求め別に旅費として八百麻克を胴巻に納め、鞄二つに寫眞機一個、是れて一通りの用意は調ふた。

▲月の十九日午後一時愈々出發、新藤、門脇、二木、唐木、佐藤の面々は態々停車場迄見送られた、イデ首途の腕堅めと「プラッホーム」にて一同を撮影し滊笛一聲、煙を殘して民賢を去つた。

▲午後二後頃より降雪霏々、寒氣肌に徹すと云ふ按配て中々寒むかつた、Augsburg, Ulm, Essling, Geislinge の各停車場を經て午後六時 Stutgartt に着し「ローヤルホテル」へ投宿した、博士は馬車を驅て歸省中のベルツ博士を訪問された『若し御馳走が出たら君も呼ひによこすから食事せすに待て居れ』との一言を頼みに空腹を抱へ今か〳〵と待て居たが七時に成ても八時に成ても音沙汰がない、漸く九時過に近藤氏は失望の体て歸宿し『ベルツは目下埃及へ旅行中て不在、例の妻君が日本人がなつかしいと云て珈琲斗て今迄引張られたには大閉口さ』との話、早速二人て旅館の食堂に入り「ビール」三杯を引掛け食事を濟したが雪は尚ほドシ〳〵降止まなんたから室内に籠城する事とした

▲翌朝八時起床、珈琲と「プロート」を喫し市立の Kalarien-Hospital に至り參觀を乞ふた、醫員は親切に院内を案内し二三の手術をも傍觀する事を許した、外科部長は Buck-halt と云ふ溫厚の長者、余等の爲めに「エッキス」光線に關する種々の器械を出し説明するなと頗る丁寧てあつた一体歐洲各國の病院は多數の來訪者あるにも不係、親切に參觀を許すは一の美風で日本なとの様に御役所風を吹

かす樣な事は少しもない

▲次て二ヶ月前に竣工したと云ふ Dyagonisches Hospital を參觀した、工費四十万圓二年の歳月を費して出來上りたる者、極新式のハイカラ的て何れも整頓して居る樣に見ゐた殊に余の注目を引きしは床、壁腰なとは廊下迄一樣に陶器の「プラスター」を用ひたる事てある、日本なとては四十万圓出しても中々此樣な美麗なる者は出來ない、現に我金澤病院の如きは三十有余万圓を要したにも不係、丸て比較にならぬ程てある、一体獨乙では貲金の高き職人を使用し反て日本より完全なる者の出來るのは全く建築術や工業の發達してをる御蔭てある。

▲「スツットガルト」と云ふ處は大學こそないが、人口貳拾五万を有する「ウッテンベルク」の主府で、第八師團の所在地、千四百八十二年「エベルハルト」五世の初めて君臨せし舊都てある、市内をブラ〳〵歩みつゝ高等美術學校、「ウイルヘルム」即位二十五年紀念柱、クリトプス公の銅像、古城、ムゼウム、「シユロスガルテン」等を見物し午後四時四十分發にて「ハイデルベルグ」へ向ふた。

▲獨乙國内の瀛車旅行は只莎莊たる牧場と鬱蒼たる殖林のみで極めて單調てある日本の樣な秀麗なる山水は中々見當らない又西洋人は主として肉食をするから野菜畑なと極めて少なく可惜地面を大なる牧場とし牛や羊を放養してある、我々の目より見れは勿体ない位てあるか之れても穀物や野菜を作るより利益かあるさうだ、モー一つは平地の殖林てある、人の知る如く獨乙の金利は僅に二分五厘―三分位てあるから少し金を持たものは三十年或は四十年を一期として殖林事業に放資し大なる利益を得るのてある、日本の人は只目前の利にのみ走り、永遠の謀を講する者か少ない樣たが殖林の事なとは不用の地を撰ひ大に發達せしむる必要かあると思ふ。

▲瀛車が Bruchsal て止た時四十才斗の貴婦人か十才斗の男兒を連れて車室に入り來り突然『今日は、貴君方日本人アリマスカ』と國語て話掛けた我々はこんな所て日本語を西洋人の口から聞うとは思はなんた、其譯を問へは彼女は口重く『私旦那ト一所ニ横濱七年居リマシタ、一昨年旦那病氣デ死ンダ、私此ヨハン(息子ノ名)連レテ國へ歸リマシタ、只今日本人見ル、私旦那ノ事思出マス』と目は已に涙を以て潤うて居た、人は感情の動物なり懐舊の情に堪へないのも尤てある、余等は同情の念を禁せす、種々祖國の話を持出して慰めてやつたが日本語の充分了解せぬ場合に獨乙語を話すと彼の女は『ドーカ日本語話シテ下サイ私國歸テ、日本語聞ク初メデス日本語ホントニ宜イ私誠ニ嬉イ』と語り興する内瀛車は已に「ハイデルベルヒ」に着したから此處て袖を分ち「オイロッ

パホテル」に投宿、赤鷄と云ふ料理店にて夕食し後市内を散歩し十時頃床に就いた。

▲翌日大學の外科部を訪ふ Prof. Czerny 氏一々丁寧に各室を按内し胃癌摘出、甲狀腺摘出の手術を傍觀し午後一時再ひ赤鷄「レストラン」に至る偶々醫學士稻垣長三郎氏（現今臺灣醫院醫長を勤むる人）あり食卓を共にし同氏の案内にて市の背面にある古城及ひ公園を見物に出掛けた。

▲Heidelberg は人口五万餘 Necker 河の左岸に沿ふたる細長の市街で前后に山を負ひ一寸小意氣なる處てある大學は千三百八十六年に創設せられ「プラーグ」及「ウイン」大學と共に歐洲最古の者の一てある、城は市の背面、丘陵の上にありて十六世紀の終りに建築せられしもの「ルイ」十五世の攻撃に逢て大部分は已に破潰せられ唯「デッケンツルム」や「グローセン、ウルトツルム」の一部が殘留して居る、城の入口には詩人「グーテ」が常に此山より市街を眺め詩囊を肥したと云ふ古蹟かある、道を右すれは「子ッカー」河市の左を流れ、數万の人家を並へ、遙に青山の起伏する樣なと獨乙ては得難き風光てある、殊に夏期には此川にて兩國の花火の如く盛なる「ベロイヒツング」あるそうて、近鄉近在より見物に出掛くる者か澤山だろうだ、何人の作にや留學生間に傳て居る俳句かある、多少當地の面影を現して居るから左に記して置く

『山の端を月の「ハイデルベルヒ」可那』

▲古城内の穴藏に有名なる大樽三個斗ある、こは千七百五十一年に製造せられた者で長さ八五迷幅七迷、二十二万千七百二十六「リーテル」の内容を有して居る、古は酒を以て租稅に代へ此大なる樽の内へ貯へたとの說てあるか之れは余の保証する限てはない、其傍に Perneo と稱する大なる木偶か杯を手にして立番して居る、其又傍に古き時計かある其下方より下りたる繩を引くと狐の尾か飛ひ出す仕掛に成て居る。

▲午後四時 Prof. Vilpius 氏の整形外科病院を觀る、病床二百常に滿員の態てある、別に体操場あり數多の器械を陳列し疾病に應し定期的運動を爲さしむ、一私立病院として其規摸の宏大なる驚くべし氏は今尙ほ大學の員外敎授にして獨乙國中「オルトペデー」を以て高名なる人である。

▲三月二十二日午前九時宿を出て Czerny 敎授の主寄せる癌腫研究所を一見したが未だ工事中で少しも益する處はなかつたか建築費は三十万圓を要するとの事てある、一病の爲めに莫大の費を惜ます支出するの勇氣迚も日本なとの眞似の出來ぬ處だ、聞けは昨年暮、此處て万國癌腫研究會が開かれたさうだ

▲「ハイデルベルヒ」大學に在職の教授は Arnord（病）Leber（眼）Fürbringer（解）Erb（神）Vierrordt（小）v. Rosthorn（産婦）Kossel（生）Narath（外）Nissel（精）の諸氏て其他に四十六名の「アウセル」と「ドツエント」が居るさうだ。

▲午後は「チッカー」河の附近を散歩す、川は才川の稍々大なる程なれと水深さか故に能く船を通し、上下に新舊の両大橋あり右には城砦巍然として天に朝し、左岸は人煙稀に後に山を負ひ、草木鬱蒼たる處点々富豪の別莊あり頗る風光に富む、此日天候温和にして山麓に鶯の囀るを見る、迷句忽ち口を突て出つ

長閑さに龜の「ハイデルベルヒ」可那

▲午後七時より Vilpius 氏の晩餐會に招かれて主賓は近藤、稻垣及余の三名、他は氏の助手五名山海の珍味と云ふ程には至らなかつたが可なりの御馳走かあつた、夫人は今日を晴れと盛裝して坐間を斡旋し頗る得意なる者の如く見ゑた、午後十一時頃宴を辭し醉歩蹣跚として歸宿した。

▲三月二十三日午前八時「ハイデルベルグ」出發 Mannheim, Dornstadt を經て九時三十分 Frankfurt に着した當地は獨乙に於ける商業の中心地にして、日本の大坂に於けるか如く、人口三十三万五千、市街道路の完備せる事伯林に次き、停車場の壯麗なる其比を見す、其他ゲーテの生産地としてシルレルの永住地として有名である、市内には「ゲーテハウス」「シルレル、デンクマール」「Römer と稱する古代の建物、Dom, Archivgebäude, Stadtbibliothek（三十一万二千の書籍を有す）動物園「レトルマン、ムゼウム等ありマイン河市内を貫流し人家稠密頗る繁華の地てある。

▲市内一週の後或る「レストラン」にて晝食し電車にて有名なる「パルメンガルテン」と稱する植物園に趣いた。異草珍樹一として備はらさるなく、一方には大なる硝子宮殿を設け、中央煖爐を以て氣温を保ち、熱帶地の特産たる椰子檳榔樹なとの繁茂せる様は再ひ印度内地を旅行する如く、垣根には薔薇、躑躅、椿、菊、紫陽花なと春秋の花一堂の内に咲き乱れ、芳香馥郁として恰も天の樂園に逍遙するが如き心地かした。

▲園を出て Lehn 氏の管理せる市立病院を參觀した、氏は身長偉大、温厚篤實の君子、能く外人を待遇し院内を一々案内せられた、建物は五六年前に出來せしもの、結搆簡潔現代の粋を抜き、設備又至らさるなく實に其地の病院として恥しからぬ程てある。

▲午後五時「フランクフルト」を發し三十分斗にして有名の温泉場 Wiesbaden にて降車、當地第一の「ホテルロー

ゼ」へ投宿した、「ウイスバーデン」の人口は十万餘、年々浴客の集るもの十五万を越へ市街の美麗なる事「フランクフルト」に劣らす、諸事華奢にして物價又廉ならす、夕刻「ホテル」の食堂に入れは盛裝せる紳士淑女花の如く「タンツザール」には音樂に連れ蝶の如く舞狂ふもの頗る多く、何れも金に不自由なき與太連なり、午後九時隣室に設けたる浴槽に入りしも日本と違ひ浴後膝を崩して酒を呼ふと云ふ快もなく直ちに臥床に就いた。

▲翌朝雪を侵して Trinkhall に趣いた、壯麗なる建物の中央に温泉の湧出する處あり病客は其周圍に集り爭ふて之れを呑む、一杯の價十文、多量の食塩を含み其味鹹、恰も和倉の温泉を呑むか如し。

▲温泉の湧出する處は大小二十四ヶ所、温度は C 氏六十九度、大なる旅館は各室各個に浴室を設けて居る、日本の所謂總湯と稱すへき所は Kochbrunnen Anlage, Augsta-Victria Bad 等て搆造か中々立派てある其他散歩場、奏樂場、テアター、土地名産の勸工場なと浴客の財嚢を絞る機關か一々備て居る。

▲翌日午後二時一人前の宿料二十麻克餘を取られ不平滿々にて旅館を出て「ボーン」に向ふ、瀛車は歐洲大陸を貫流する來因河の右岸に沿て走る、有名なる「ローレライ」鼠塔、「ナチヨナールデンクマール」古城趾などの名所舊蹟少からす、河中には瀛船の往復するあり、對岸にも一條の鉄路を通し両々相競ふて走るの狀面白し。

▲來因河は人の知る如く獨乙の西、佛蘭西との間を流れ、瑞西より出て北海に注く長河にして、幅二百五十一五百四間、底深く水勢急ならさるを以て瀛船の便あり、両岸は有名なる葡萄の産地にして頗る名所に富む

▲古蹟中「ローレライ」は「ハイチ」の詩に據て有名なる所なり、只見る一岩石の河中に突出するに過きされとも、其昔し岩上に一美人あり夕陽に至れは必す出て、金髪を梳る、漁人の淵に航するもの其美に魅せられ遂に渦中に溺ると「ハイチ」の歌は今尚一般人口に膾炙す

„Die Loreley"

Ich weiss nicht, was soll es bedeuten, dass ich so traurig bin; ein Märchen aus alten Zeiten, das kommt mir nicht aus dem Sinn.

Die Luft ist kuhl und es dunkelt, und ruhig, fliesset der Rhein; der Gipfel des Berges funkelt im Abendsonnenschein.

Die schönste Jungfrau sitzet dort oben wunderbar; ihr gold'nes Geschmeide blitzet, sie kämmt ihr goldenes Haar. Sie kämmt es mit goldenem Kamme und singt ein Lied dabei; das hat eine wundersame

gewaltige Melodei.
Den Schiffer im kleinen Schiffe ergreift es mit wildem Weh, er schaut nicht die Felsenriffe, er schaut nur hinauf in die Höh'.
Ich glaube, die Wellen verschlingen am Ende Schiffer und Kahn; und das hat mit ihrem Singen die Loreley gethan.

▲鼠堵（モイゼツルム）の有名なる事も「ロレライ」と相伯仲す、昔一人の男あり爭論の極、某友人を殺す亡念數万の鼠となり夜な〳〵來り襲ふ男僧となり來因河中の一島嶼に難を避く、鼠又河を渡り遂に僧を嚙殺すと後の人其冥福を祈らむが爲め一寺を建立す「モイゼツルム」即ち是也、今尚ほ楚々たる小林中、鐘樓の屹立するを見る。

▲午後五時漸く「ボーン」市に着しAdlerhotelに投宿した前夜に懲りて一人前四麻克と云ふことに定め膳を落附けた、價の安きものに良い者のなき道理にて、室内の裝飾なと甚た下等である、直に宿を飛出し市内を見物し勸工場に入りて二三の買物をなし、夕刻宿の食堂に入り當地名産の白酒に醉ひ十一時頃臥床に趣いた。

▲「ボーン」市は人口八万二千餘、フリートリッヒ、ウェルヘルム大學を以て有名てある、來因河市の南端を流れ、道路家屋清潔ならすと雖も「ミユンステル」、「ベトウェン、デンクマール」、「プロフィンチアール、ムゼウム」ライン橋（長四百六十迷）等皆一見の價値がある。

▲三月二十五日午前九時大學の外科部を參觀す、時恰も日曜日なるを以て教授不在、嘗て日本に解剖教師たりしDänetz氏の子息親切に案内の勞を取られた、現今の建物は千七百二十三年に竣工せしもので頗る舊式てあるか古來獨乙皇帝の一家族は皆な此處に來りて學ふと云ふ名譽の大學てある、

▲醫科の教授には Pflüger（生）Saemisch（眼）Binz（解）George（解）Frisch（産）Schultze（内、學長）Finkler（衛）Bier（外）Ribbert（病）Westphal（精）Doutrelepout, Nussbaum（局）Welb（耳）Kruse（黴）の諸氏あり殊に Augst Bier氏は脊髓麻醉法の創見者として鬱血療法、ォルトペジーの鼓吹者として有名なる人、十年以來鬱血療法に熱中し、新舊有らゆる炎性疾病、結核、腫瘍、等に對し各特異なる吸引裝置を用ゆ其盛なる事驚くの他なし、現今歐洲醫界に於ても漸く其價値を占むる樣に成つた氏は又 „Hyperämie als Heilmittel" なる書を著し大に此方を奬推して居る、

▲二十六日午前九時再びボーン大學に行き外科部にビール教授を訪問し甲狀腺切除術、膝關節切除術（結核）を傍觀した、敏腕と云ばんより寧ろ乱暴に近かつた、氏は年

齡四十五六、体軀偉大、頗る快濶の人なり、術后鬱血療法室に至りしに乳腺炎、結核、關節炎、強直、カルブンケル等の患者多數相集り盛に該療法を施して居るのを見た。

▲午後三時五十分「ボーン」を出發し五時十分「ケルン」に着した同市獨乙第一の「ドーム」(寺)を以て、「エルツビショーフ」在住の地を以て有名なる處、人口四十二万八千來因河其一隅を流る、中央停車場を距る程遠からぬ處に「ドーム」寺かある、千二百四十八年より七十四年の歳月を費して建築せしもの、入口の扉の高さ二十九、三迷、塔の高さ百五十七迷屹然として天に朝す、寺内の結搆亦善美を極め些細の彫刻に至る迄歴史的有名の者のみてある、寺を出て市内にて Wallraf-Richartz Museum「ラートハウス」、フリートリッヒ(三世)デンクマールなと有名なるもの二三を見物し午後六時再ひ停車場へ引歸した。

▲午後六時出發同八時三十分 Aachen 着此處にて一泊する豫定なりしも、十二時四十分巴里直行の瀠車あるを聞き宿泊する事を止め或るレストランに入り夕食す、傍らに蜆貝(稍大なり)の「ソップ」を食する者あり其味甚た美なりとの言に從ひ忽ち二皿を平けた、處が暫くすると腹痛嘔氣を催したから鵜の様な眞似をして皆悉吐き出した暫時の後氣分かよく成つたから市内に出て戰時紀念碑、Elisenbrunnen なとを見物した、盖し當地は一の温泉場にて Quirinus-Rosen-Cornelinsquelle (四五—五〇度)なとの温泉湧出場あれとも其量少なく僅かに Trinkbrunnen として用ふるに過さすとの事てある、人口は十四万、家屋は二三階建にして我東京に能く似て居た。

▲一時間斗古代建築に撲したる新停車場に休憩し、十二時四十分巴里行の瀠車に投し夢の中に Lüttich, Namur, Cherleroy, Labere, Creil なとを過き二十七日午前八時愈巴里停車場に着し稅關の檢査を受け Hotel Louis la Gland と云ふ簡潔なる旅宿の二階に落付た。

▲朝食後一時間斗休憩し、ソロ〳〵見物に出掛けた、宿を右すれは直く Vendme と稱する大廣見かある其中央に天を摩するか如き高い柱の上に人物の直立して居る戰役紀念碑かある、柱には種々の彫刻を施し中々立派てある、Rivoli と云ふ町を通りて右の方へ行くと俗に凱旋馬場と稱する大プラッツへ出た、右の方には Champs-Elysees 街を通して遙に大凱旋門を望むへく、左方には Seine 河を隔てゝ「ルーフル宮殿見るへく、前後に海、陸軍省あり、中央に有名なる埃及式方尖柱(一個の石よりなる)高さ七十六呎、重量二百四十噸、千八百三十一年埃及王か「ルイフイリップ」に寄贈せしも、五年の歳月を費して運搬せしと云ふ、之れに接して二個の噴水盤かある、共和の

女神アルサス、ローレンの喪服を纏へる立像を安置す、水は縱橫無盡に噴出し中々の偉觀である、

▲「シヤンセクセー」町を經て先つ日本公使館を訪問した、新任大使未た着任せす書記官某なるもの頻りに「ハイカラ」風を吹かし我々を見る事土百姓の如く、待遇甚た冷なり、官吏の橫柄なる事は今更喋々するの要なしと雖も而かも万里の異鄕にありて同胞より冷遇を受くるの不快は一層感を深くした。

▲大使館は凱旋門の近傍「アベニューマスセー」町の七十五番地館にして家屋狹隘、普通の民家に比して劣る事數等、是れで大使館で候とは、餘りと云へは情けなし、聞けは近々巨資を投して新に大使館を建築するとの話だが是非ソーしてもらわねは我々迄の肩身か狹くなる樣な心地かする、

▲大使館より紅花綠樹の間を縫ひ游園を出れは世界一と稱する「エドワール」凱旋門あり、千八百六年奈翁一世の時工を起し、同三十二年に落成せしもの、高さ五十迷其雄大壯麗なる事言語に絶す、五十參を出し二百八十の階段を攀ち項上に達し四方の風光を眺望するに十六條の大道門を中心として放線狀に離散し、高樓長く數線を畫する處、綠樹翳鬱、人馬蠢々として其間を之き、都下の全景一眸の裏に落つ、大使館にて受けたる不快の念も茲に至りて忽ち消へ失せた。

▲門を下り「ブーロギ」公園に入れは森林蔭をなし、紅花其間を點綴し、士女の輕車を驅て巡遊するもの引きも切らす、巴里の巴里たる所以茲にありと不思感歎の聲を漏した。

▲園を出つるとき乘車を勸められエーフエル塔までと、云ふが儘に一法半を奮發し俄かに大臣に立身せし心持にて長安を乘り廻したるは盧生が夢、十五分ならざるに塔下に到着した、もう少し遠かりし筈と小言を並へても追付かす、投くるが如く賃金を拂ひ、受附にて登上切符を求めた。

▲エーフエル塔は人の知る如く万國博覽會の紀念物として、世界第一の高塔として有名てある、彼の大ピラミツドや華盛頓塔も其弟分に過きない、塔の高さ三百迷、數層の階に分れ眺望臺、音樂室、賣店等あり、登るに昇降器を以てす、頂上に至れは天清して雲なく、地濶して人烟簇り、道行く人は群蟻の匍匐するか如く、遠くセイン河長に流れ、水に沿ひ丘陵の起伏する樣なと其妙云ふへからす、塔上にて紀念はがきを故鄕に送り、夕陽西に舂く頃塔を降り再ひ車に賃し歸宿した、終日の見物に足は櫂木の如く、巴里名產の葡萄酒に勞を醫し眠に就たのは彼是十時頃なりし。

▲三月二十八日午前九時旅宿を出て第一に「ルーブル美術館を見舞た、館は佛帝歷代の宮殿にして「セーン」の流に沿ひ「リホリー」街に接して宏壯美麗なる一廓をなし、四方に門あり、正面は所謂小凱旋門にて、門を潜れば廣濶なる庭園あり、樹木の秀、泉石の美、自ら風致に富み所々に裸体の大理石像を建つ、館内には無數の區劃を設け圖書、彫刻、陶器、刺繍等の諸品を陳列し時代に依り、國に順ひ、古きは希臘、羅馬時代より近世の美術品に至るまで一として備らさるなく一見世の變遷及進歩を知る事が出來る樣に成て居る、殊に佛畫の優秀にして万金に價するもの、數百の金剛石を彫めたる天冠等に至りては迚も我々凡眼の能く評價し能はさる所である。

▲美術館に半日を費し或るレストランにて四法を張込み晝食を整へ、再ひ大臣馬車にて巴里の南隅なるコブラン織工所に趣た、建物は差して立派てはないが有名な所と見に續々として參觀人がやつて來る門衛は人數を計り二十人を一團とし入場せしめた、第一、第二、第三の室は毛氈標本の陳列場で一寸見ると古穢き毛氈だか謂れ因緣を聞て見ると古代ペルシャ製の敷物から歐洲各國時代の繻緞織を陳列し有名なる畫家の筆跡を殘した者のみて、一枚の敷物にして猶且つ三十万法なと云ふ貴重な者か少なくない就中「ラフアイエル」筆祭天の圖、佛帝ルイナ四世(?)の當場を參觀せられたる圖の如きは世に得難き珍品であるそうだ第四、第五、第六號室は細長き工場で窓に對し原圖を掲け恰も蓆を織るが如く種々の色彩を有する經糸を以て摸樣を織り出すのである、色の種類は六百餘、各色を其濃淡に順ひ二十四段に分ち都合一万四千四百種とす、だから出來上りたるものは原畫を欺く迄眞に迫り其精巧なる事感服の他なし、されは時間を要することも非常な者で一日僅に五寸平方を織り出すに過きす、大なる敷物に至りては十年の長日月を要し數方圓の上に達する者少なからすと聞た、又極めて緻密なる者は各部を離斷し各職工其特技を振ひ後に之れを縫合する事もあるさそうた、京の西陣なとは織物の名所だか、こんな所へ來ると全く顔色なしとても云はねはならぬ。

▲歸途奈翁の廟所を一見せんとせしも一週二回の他、見物を許さす何處ともなくブラ〳〵歩む内花柳病專門の鼻祖 Licard の銅像を發見し紀念の爲め撮影し一先つ歸宿して宿の食堂に入り夕食後相談は芝居を見物する事に一決した。

▲巴里で有名なるもの三、曰く凱旋門曰く美人曰く「グランドオペル」是なり、巴里に來て此三者を見されは巴里を見物したと云へない、今や我々は「グランドオペル」を見むか爲めに入場券を求めに出掛けた、所が一時頃已

に賣切れて一枚も殘て居らない已むを得す他の賣捌所を探し漸く二法の三等切符を六法に讓り受け、燕尾服てなければ入れないと云ふ處を「フロツコート」て胡麻化し、三階の一隅へ落付た、一体佛國の演劇は世界ても有名な者てあるか、就中此「グランドオペル」が著名てある、政府は斯道を奬勵せむか爲め年々莫大の補助を與へ外客を巴里へ誘引する政策を取て居る位たから其建築美を極め麗を盡し、多くは紅青白の大理石を以て疊み上け、中央階段の如きは光彩燦爛として鏡の如く、歷代の名優、女神の像なと所々に裝置し、兵士は門前に砲を捧けて場の內外を警固するなと丸て宮殿へても入るか如き心地かする、棧敷は三階より成り、紅帳金壁、人目を眩惑し、平坪は前方漸々低くして優に四千人を納むへく、赤天鵞絨を張りたるバチ椅子を備へ一々番號を附してある、舞臺の有樣、道具の工合、背景の濃淡なと眞に迫り、是れを日本の劇場に比すれは實に雲泥の差かある、加之電燈の明滅する間に道具立を一變するの速なる丸て人間業とは思へない、劇は能の如く芝居の如く一種優美高尙の者にて登場俳優の多き時には百五十人に達し、舞臺の前方一段低き處には百二十人の樂師整列し一擧一動調子を合し音樂を奏するの狀は拙き筆の能く盡す所てはない。

▲翌二十九日には方向を轉し屍体陳列場を見物した町名は忘れたか何ても「セーン河の上流であつた、門前には澤山の人相書や寫眞を揭示し、場內には十二三の屍体を硝子張の箱に入れ順序よく陳列し衆人に縱覽せしむるのだ、勿論之れは住所不明の者共斗りて溢死、溺屍、鐵道往生、行倒人等て見るも酸鼻に堪へない、所員の語る處に依れは一年間約千名の住所不明なる變死者あり各屍体は七日間陳列し跡い寫眞に取り保存する規則たさうた、大都會の中央に此樣な慘事あるを思へは文明も餘り宛にはならぬ。

▲變死者の冥福を祈る積りてもなかつたが「セーン河に沿て道を下ると巴里第一の寺院「ノートルダム寺の前へ出た、不信心者の佛參もチト變だが好奇心に驅られ寺內に入り「アーメン」とも何とも云はす、彼處此處を見廻すと歷代の名士、英雄、名優なとの大理石像、碑銘なとが澤山あつた、寺院の構造は大同小異であるが、前面に四角な二本の塔かあつて、種々の彫刻や聖像を以て飾り、中々立派な寺院には相違なけれともれ寺は澤山見飽たから是と云ふ面白味もなかつた。

▲夫れから Bastille 廣見の革命紀念碑（一八三六）を見た、高さ五十間斗の銅柱の上に金色の裸体エンゲルか、羽根を廣ろけ走る樣な格好をして居た、序に共和紀念碑も見物に出掛けたが、相變らす女神の像で、下の方には

古代の神様や、獅子か之れを守護して居た、一体歐洲各國の紀念碑には、多く女神か裸美人を用ひてある、兎角女でなければ治りがつかぬ國と見ゐる。

▲Paul町と云ふ處から地下鐵道に投し何とか云ふ歷代の古英雄を祭れる墓地を見物した、流石文明國の墓地丈あつて大理石の墓碑や銅像なとが澤山ある、道路の如きも美麗なる「プラスタ」を敷き十三四名の人夫日々園内の掃除に從事し、其清潔なることは感服の外ない、「チルソン」の墓や外科醫として有名なる奈翁の寵臣Larryの墓に詣て、紀念の爲め撮影せむとして守衛に叱られ早々門を出て「サンナー病院へ趣いた。

▲由來佛國は蠟細工を以て有名なる處てある殊に「サンチー病院の皮膚病蠟細工と來たら其名か世界に轟て居る尤も同院は七十年前の建築だから決して立派とは云へないが其時代の建物としては可なり能く出來て居る、刺を通して第一に標品陳列場に入た、標品は皆な硝子箱の内に納め主として皮膚病及花柳病の寫實摸型で寄生性、炎性、萎縮性、肥大性、分泌異常性、傳染性皮膚病及腫瘍梅毒等其部門に應し一々區劃を設け、病名と經歷を附してあるから一見して其何たるを知る事か出來る、患部の色澤や水胞、膿汁、痂皮、潰瘍の有樣なとは實物か僞物か殆んと區別か付かぬ程精巧てある、技神に入るとは實に是等を云ふならむ、標品の數は凡そ六千以上て、一週二回無料にて縱覽を許し梅毒の恐るへき事を公衆に示す事にしてある、蓋し梅毒は歐洲中ては佛國か本場だから、見せしめの爲め是れ程にするのも無理はない、獨乙へは奈翁か歐洲を蹂躙した時代に著しく此病を輸入したから俗間には梅毒を佛蘭西病と名命して居る。

▲歸途尚ほRambutaue町に蠟細工の生人形を見物した、主として歷代の帝王、英雄、美人、四人なと多く其容貌實に生けるか如し、時々廊下なとに案内者、見物人を擬したる人形あり容易に其眞僞を分つ能はす、余は途中て人形の査公に道を問ひ大失敗をやらかした、先年當地で大喝采を博した川上貞奴には蠟細工で初めてお近附に成つた。

▲三月卅日午前「クルニー古物博物館Le Musee de Cluny へ出掛けた館内には古代希臘、羅馬の美術、建築品等近世に得難き珍什奇品を網羅し古色蒼然人をして自ら崇高の念を起さしめた、附屬の庭園にも種々なる古き立像か陳列してあつた。

▲夫れより再ひ奈翁の廟所へ趣く、遙にBreteuil町より望めは「ドーム形の大伽藍高く雲を凌き、金光燦爛として太陽に輝き頗る非常の偉觀を呈して居る、入場券を求め堂に上れは大理石を以て疊みたる大廣間の中央に深さ三

間直徑七八間の圓坑あり、周らすに柵を以てし、中に一時歐洲全土を風靡したる古英雄奈翁の褐色大理石棺を安置す周圍には戰鬪の際各國より奪ひたる軍旗六十餘旒を飾り床上には奈翁七大戰の經歷を摸細工を以て現すなど墓も人物も世界第一なり、

▲廟所を通り貫け其後にある癈兵院をくる〳〵廻りて有名なる「アレキサンデル三世橋へ出た東京で云へは日本橋と云ふ格で頗る繁華の處てある、橋はセーン河に跨り全部石より成り一本の橋杭なく、兩端に奔馬と女神の彫刻ある四本の飾柱を建つ、橋を渡れは左右に万國博覽會の遺殘物たる大なる「パラスト」かある、左の建物へドシ〳〵人か入るから余も好奇心に驅られ跡へ續て行くと入口にて五法の入場料を請求された、是れは高いと思ふたが、跡より續々人がやつて來るので引歸す事も出來す、仕方なく入場料を拂ひ内部へ入ると大なる曲馬場てあつた、馬場は長さ百間幅三十間位て屋根は「ドーム」形の硝子天井となし周圍には幾十万の椅子を並へ其外廓に摸範的良馬の石膏像や馬具を陳列せし參考室あり中々の大仕掛てある、競馬は各國撰手の寄合なれば障害物競走、高飛幅飛なと頗る巧にして屢々手に汗を握らせた跡て聞くと是れは Le Grand Palais と稱する著名の曲馬場てあるさうな。

▲三月三十一日午前 Pasteur の傳染病研究所へ行た、P氏は諸人の如く「ゼンナー」氏に次て「インムニテート」の創見者として世界に有名なる學者てある其研究所は巴里の北隅で「パストー」町を狹み二棟の大なる建物か有る、一は黴菌研究所て他は同化學的研究所に成て居る、入口に氏の恐水病に於ける功績を表彰せむか爲め狂犬か子供の足に嚙付て居る「デンクマール」かあつた、現今の所員は五十餘名、敎場、試驗室、練習室、動物飼養場、消毒所、屍体燒却場等一として備らさるなく棟内には數棟の建物散在し規摸甚た宏大なり、歸路 Breteul と云ふ廣見て淺草公園の如き種々の見世物の有る處に「パストー」氏の大なる大理石像を見た。

▲確しか Vaneau 町たと思ふたが一時癌腫血清を創製し醫界に其名を喧傳せられた Doyen 氏の私立病院を參觀した、建物は餘り大いとは云へぬか諸事整頓せる美麗な病院てある、氏は當時尚ほ余等に該血清を示し動物試驗や臨床上の効果を示されたが今日の歐洲醫界には一の山師として其名を止めて居るのみたが素人間には未た勢力かあると見へ多數の癌腫患者か入院して居つた先年米國の一貴婦人か乳癌を病み十万法で受負治療を托せしも二ケ月後に死亡せし爲め、其夫より損害賠償を訴へられ大騒きをやらかしたさうた。

▲晝食後地圖を按し西端にあるChaumont公園に出掛た、電車を乘違へ反對の方向に行き大々的赤毛布を演した、巡査に問へとも言語不通の爲め要領を得す、地圖を示して三時後に漸く園に達する事を得た、此公園には山もあり、湖もあり、大なる岩窟もあるか之れか皆人造石て出來て居る、湖上には五十間斗の釣橋を設け、山より山に通し草木鬱蒼人烟稀に鶯聞白鳥の安かに眠るなと紅塵万丈の裏にのみありし身には一入の愉快を感した。

▲巴里滯在の日取も已に盡き四月一日には愈々倫敦へ出發せねはならぬ事となつた。余は此都を去るに臨み尚ほ書き漏た二三の雜觀を記ふと思ふ。事新しく云ふ迄もなく巴里は世界中一二を爭ふ繁華の都にして人口二百五十三万餘、常に十八万の他國人出入し周圍は二十一哩の疊壁に依て圍まれ、面積の三分の二は建物を以て蔽はる、地勢は大体に於て平坦てあるか所々に高地丘陵の起伏する個所もある、人若し「エーフエル塔に登るときは巴里全部の大觀を賞し得るのみならす、森林の繁茂する處金殿玉樓の散在せる一大美觀は倫敦や伯林の如き變化少なき都と大に其趣を異して居る。

▲市街は一般に道幅廣く兩側に樹木を植へ大廈高樓切て揃へたるか如く整列し其觀望の雄大なるは又倫敦伯林の遠く及はさる處なり、然れとも途上車馬やオムニブス多き爲め馬糞道に堆く、廣告紙雪の如く散亂し、其亂雜熱鬧の狀は寧ろ獨乙の閑雅清潔なるに劣れり。

▲巴里は世界驕奢の地なりとは余の屢々耳にせし處なり而かも途上垢衣蔽帶の人多く、容姿の掲らさるは豫想外なり、加ふるに諸事不秩序にして游治淫逸是れ事とし情落腐敗の極に達せるは蓋ふへからさる事實である、白晝怪しけなる婦人の袖を引く者、査公の目を忍ひて奇怪なる出版物を強るの徒多きは驚くの外なし。

▲巴里の「レストラン」や珈琲店は先つ獨乙と同樣てあるか只大都會丈に中々立派な處が澤山ある、少しく上等の處に入れは十五法位の夕食は珍らしくない、飲料は「ビール」少なく大抵葡萄酒を用ひて居る、「カッフェジョセーフ」と云ふ「レストラン」の料理長は年俸一萬二千法を取るとの話を聞たか是等は獨乙と異なる處てあろう、一寸目に付くのは珈琲店の數非常に多く二三十軒も店を並へて居る處もある、此等の店は室内のみならす春尚ほ寒き三四月頃ても店先に椅子や「テーブル」を列べ往來の人を見物しなから食事をする慣習かある、物好も亦た甚しではないか。

▲巴里の夜景は又た一入の眺めてある、市街に電燈や瓦斯の多き事は云ふ迄もなく、各商店は競ふて屋上迄赤、綠、黃、紫の電燈を以て種々の文字を現はし、明滅變現

極りなく、辻々には廣告を挾みたる活動寫眞を窓に映出して客足を止むるなど、非常の雜踏を極め、人をして流石は世界の大都會だと感服せしむる程である。

▲四月一日午前九時五十分愈々巴里を發す Amies, Pau-Ligne を經て午後一時 Calais 港に着し佛船「ノルド」號に投し三時間斗で海峽を渉り英國の Dover 港に上陸す、船中日本鐵道會社の山本、岡野兩氏に逢遇し、瀛車と共に英京倫敦 Old comper street の Hotel Sives と云ふ旅宿に投じぬ Victoria 停車場では稅關の爲め約一時間斗の暇を取られ夕食後、一日の疲勞を醫せむか爲め早く床に就いた。

▲倫敦は世界中最大の都會にして長さ十五哩、幅十二哩、面積六百九十方哩、道の延長七千哩に達し、人家八十餘萬、人口五百六十萬を越ゆ、道路四通八達、車馬輻輳、肩摩轂擊、實に立錐の餘地なく其熱鬧混雜の狀は倫敦を見さる人の豫想し能はさる處である、されは少しく繁華の所には數人の巡査中央に立ち、人を止めて車を進め、車を制して人を通し、山なす車馬、蟻の如く群る通行人を指揮する事、名將の兵を使ふか如く人は右に避け車は左に寄るなど途上自ら一定の法則あり秩序整然として秋毫も侵すことなきは倫敦特有の美風である、

▲四月二日午前九時中村工學士の案内にて有名なる「タワー」の古城を見物した、城はテームス河の岸、「タワー」橋の下流にあり其古は一の城砦であつたが今は古物博物館の樣に成て居る、構造は悉く石より成り極めて堅固の建物である、階上階下には古代の武器や王冠などを陳列し、奇妙なる制服を着けたる憲兵か所々に見張をなし非常を警戒して居た、城后に出つれは「テームス河滔々として其麓を流れ、少しく上流にタワー橋あり、流石世界に其名を知られたる丈けありて、建物の堅固壯大なる事驚く可く、瀛船の通するときは下橋中央より上に開き人馬は空中の上橋を通行する樣に成て居る。

▲晝食后ビクトリア及ブリチッシュ博物館を見物した、共に宏大壯麗なる二階建にして上下數百の室を分ち、世界万國の物品は一として殘す所なく野蠻、半開、文明と順序を追て陳列す、觀し來れは各國の發達、滅亡眼前に往來し、恰も地球を一周せしが如き感を起さしむ、東洋の部には支那日本の日用品、美術品類を蒐集し一々製造年月より作者の氏名迄記載し、一見其何物たるを知らしむ、中に後藤作の巖上大鷲の飛揚せむと身かまへる銅細工あり、羽毛一々移動し得へく、其精巧なる內地に於ても得難き珍品なり、又何れの墮落僧や賣けむ、大なる梵鐘、及釋迦の銅像迄も見受けたるが佛の相貌憂を含み轉々末世を嘲つもの丶如くなりし。

▲館を出て、Kensington 公園を遊覽す景色佳絶、中央にSerpentine と稱する大なる湖あり士女の「ボート」を繰るもの多く大木の鬱蒼たる、「アレー」の廣大なる、綠原の茫漠たる、大に日本式と其趣を異にす、人若し熱鬧の境を出て此園に來るときは精神自ら爽快を感ず。

▲四月三日午前八時起床、旅宿の「ボーイ」未た起き出す、已むなく他の「レストラン」にて朝食し King-Hospital を參觀す、醫員は丁寧に一々案内したが一般の設備獨乙の夫れに及はさる事遠し、晝食後 University College-Hospital を訪ふ恰もよし彼の腦外科を以て有名なる「ハックスレー」氏の腦グリオーム摘出術あり其他二三の手術をも傍觀せし后、瀨尾學士の下宿に立寄り午後六時歸宿す。

▲四月四日山本技師を訪ね動物園の案内を乞ふた、園はRegents-Park の一隅にあり、通券一志、規模宏大にして世界の有らゆる動物を集め、適當の温度を用ひ各種屬に依りて分類し、一日三回食を與ふ其數の多き事萬を越へ、獅々のみにても十八頭、猿猴屬八百餘種を算す、以て其一般を知るへし、余は其後伯林の「チーヤガルテン」をも見たが、尚ほ及ばさる事遠し、倫敦の動物園に非らすして實に世界の動物園てあつた、姫路三井物産支店長の紹介に依りジョン、ヘヂットの寶石店を一見せしが遂に十七「ポンド」の指環を賣付られ豫算に大なる欠陥を生した、

▲四月五日朝世界第一と稱する國會議事堂を見物すべく外出した、堂内へは議員の紹介に依らされは入る事か出來ぬから、只其外部を見た斗てある、議事堂は「テームス」河畔「ウェストミンスタ」橋に接し同寺と相對向し、千八百四十年の建設に係る、其構造壯麗を極め、總建坪三十二反、千百個の室と一百の階段を有し、無慮三百萬「ポンド」（一磅は約十圓）を要せしと云ふ、屋上雲を凌く三個の高塔あり、最高なるもの三百四十呎、幅七十五呎平方、此下に女皇の玉座あり、他の一は俗に時計塔と稱し高さ三百十八呎、四方に直徑二十三呎の顯時面を有す、打鐘器を卷くに五時間を要し鐘の重量十三噸、深夜人定り氣靜なるときは、さしもに廣き倫敦の隅々迄も其音を聞き得へしとの説てある。

▲ウ橋を渡り「トーマス」病院を訪問した、時尚ほ午前九時、職員は未た白川夜舟中にて一人も見當らなんた、同院は世界に名の知れ渡た病院て、其位置は「テームス」河を挾て議事堂と相對し十八棟の大なる建物河に沿て相並び中々立派であるが其設備は所謂英國流と來て居るから我々には餘り感服を與へなかつた、

▲午前十時病院を辭し National Gallery に行き繪畫を見物した何れも世界の名畫のみて價の高き事は丸てれ話に

ならぬ程てある、クリスト降誕の圖の如き一幅の價百六十万圓なりとは僞の樣で眞の話てある、總して西洋畵の高價なるは日本に於ける佛画と同しく宗教上の者に多く羅馬、希臘の盛なる時代の作、最も貴まるゝか如し、近代の畵伯か腕を振ひし者も澤山あれと十万圓を越ゆるもの少なし、されと余等の凡眼には反つて近代の畵に價値あるか如く、才筆縱橫、眞に迫り吾人をして垂涎を覺へさらしむ底の名畵が澤山あつた、

▲以上の他、滯京五日間に眼を通し足を運ひし處て有名なるは「ウェストミンスタ」寺 Buckingham 宮殿 James 寺 Albert 館及塔 Pall-Mall, Waterloo-Place, Marbele 門 Trafalgar 柱 Paul 寺 Royal 取引所、ロンドン橋等てある、分けて當地の「ハウプト、ストラッセ」とも云ふへき Piccadilly 町の如きは晝は人馬を以て塡められ、夜は數千万の電燈輝き渡り巴里にも增して一層美麗なる光明世界を現出して居つた。

▲倫敦市内の交通機關は途上に多數の辻馬車、乘合馬車（オムニブス）ありと雖も之れのみにては迚も通行者に滿足を與ふる事か出來ない、されは地平線を離れて空中に通路を設くるか、或は地下に人道を穿つより他に良策はないのてある、機を見るに敏き英人は業已に千八百七十年に「デストリクト」なる一會社を組織し地下電車を設けた、其費用は一哩七百五十万圓、所に依りては一「ヤード」一万圓即ち一寸に三百圓を要したとの事てある、一年間の乘客二億を越ゆるは珍しくない、其造搆は地下九十尺の處に白煉瓦を以て積みたる「トンネル」を穿ち、電力を用て体裁よき三四の列車を運轉す室内及隧道内には數多の電燈あり又處々に換氣口を設てある、停車場へ行くには市街の廣見に地下に降る入口あり、切符（五錢均一）を求め待合に入れは三分毎に待合室自然に昇降器に因て地中に沈み停車場に達する仕掛にて中々便利に出來て居る、茲に一寸滑稽なるは、停車の時間少なき爲め、慣れさるものは屢々「スタチオン」を通り越し何邊も同一の處を廻る事かある現に中村學士は二回迄降車すへき處を通り越し、三回目に漸く目的地に達したと云ふ赤毛布談を自白した、モー一つは地下鐵道の入口と市内の地下便所の入口とは同一の搆造に出來て居るから、屢々間違へ易い、余は便所内で、急て來た人が小便もせす、直ちに上り行く者を度々見たか、是等は皆な便所と、地下鐵道とを間違へたアワテ者てある、イヤ有体に白狀すれは余も二三回此アワテ者に成た經驗を有するのてある。

▲倫敦は世界富豪者の集合所てあると同時に、又貧乏人の巢窟てある、京に田舍ありとは即ち此事た、人若し倫敦の西部のみを見れは金殿玉樓軒を並へ盛裝せる紳士淑

女踵を接すと雖も、テームス河を渡り市の東端に至れは、襤衣汚袴、一見嘔吐を催す輩、一團をなし、食物は更なり、飲料水の供給をさへ得る能はすして饑渇に泣く者あり、床虫の襲撃に逢て苦吟する窮民あり、從て惡黨草賊横行し、英國犯罪の三分一は此貧民窟より出つと云ふ、去れは此の魔界に足を容るゝときは如何なる危險に會するやも知るへからさるか故に、探險を敢てせむとする者は、豫め警視廳に申出て保護を願はさるへからすと、余は『君子危に近寄らす』と云ふ格言に從ひ、此興味ある魔窟を見物する事を中止したが、今より考ふれば頗る殘念である。

▲倫敦は人家稠密にして道路の他、毫も空地を有せさるか故に巴里と違ひ、只さへ霧深き地なるに、數百萬の煙突より吐き出す煤煙は朦々として天を覆ひ、大陽は爲めに光なく衛生上極めて不健康の地である、去れは市は各所に公園を設け、民は協同して地所を買入れ私立の小園を設くるもの多しと聞く、公園中大なるものは「ハイド」、クリーン、James, Rattersea, Regent 等である、殊にハイド公園は市内の中央に位するを以て晝食後、貴紳淑女の馬車を驅て園内を往復するもの絡繹として絶間なし、人若し倫敦の精華を伺はんと欲せは此處に來りて一時間を費せは足れりとす、

▲四月六日近藤博士は米國に向ひ余は午前九時「ビクトリア」停車場を發し正午「ドーバー」港に着、白耳義の滊船「プリンチッセ」號にて海峽を渉り「オステンド」港に上陸した、午後四時伯林行の急行列車に投し白耳義の Gent, Brussel 等を通過し同夜十時獨領 Köln にて滊車を乘換へ翌朝七時五十分伯林着、直ちに日本倶樂部に行き旅裝を解きたる時は丸て故郷に歸つた樣な心持かした。

▲一休の後直ちに佐々木學士の下宿を訪問し同君の好意に依り、四五日間處々を見物し四月十一日午前十時半伯林發「ライプチッヒ」、「エカール」、「レーゲンスブルヒ」等を經て午後八時民賢の下宿に歸着した、伯林に於ける見聞又少なからすと雖も幷は他日改めて報告する事とし、一先茲に筆を擱く。

▲之れを要するに此回の旅行は前後廿四日間にして獨、佛、英、白の四國を通過したか余は「ベデカ氏の「ライゼブッフ」に據り、地圖に便り、足に任せて縱横無盡に見物せしと雖も言語の通せさる爲めに、得る處比較的少なく茲には唯余の眼底に映した一端を記述したのみで『英佛咄旅行』の名の因て起る所以も亦此處にあるのだ穴賢。

＊　＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊　＊　＊

# 會告

## ○寄贈及交換書目

（六月廿四日迄領收ノ分）

日本助產婦新報　一〇九、一〇、一二、
東京醫學會雜誌　二一ノ六、七、八、九、一〇、一、
廣島衞生醫事月報　九九、一〇〇、一、
中外醫事新報　六四八、九、五〇一、二、三、
東京醫事新誌　一五四、五、六、七、九、一〇、一一、一二、三、四、五、六、
藥石新報　六〇二、三、四五、六、七、八、九、一〇、
藥學雜誌　三〇一、二、三、
日本醫事週報　六二六、八、九、三〇、一、二、三、四、五、六、七、八、九、四〇、
治療新報　六〇、一、二、三、
醫海時報　六六七、八、九、七〇、一、二、三、四、五、六、七、八、九、
醫學中央雜誌　四九、五〇、一、二、
醫事新聞　七三〇、一、二、三、四、五、
藝備醫事　一三〇、一、二、
衞生談話　七ノ三、四、五、
大日本私立衞生會雜誌　二六六、七、八、
皮膚科及泌尿器科雜誌　七ノ一、
眼科臨床醫報　一五、六、七、八、
治療藥報　二一、二、三、
產科婦雜誌　八八、九、九〇、
臨牀彙講　一〇一、一二、
神經學雜誌　五ノ一、六ノ一、五ノ二、六ノ二
日本消化機病學會雜誌　五ノ六、六ノ一、
日本眼科學會雜誌　一一ノ三、四、五、
順天堂醫事研究會雜誌　四一、二、三、
岡山醫學會雜誌　二〇六、七、八、
莊內醫學會々報　五三、四、五、
成醫會月報　三〇一、二、三、
鎭西醫報　一〇四、五、
校友會雜誌　四三、
研瑤會雜誌　七、
校友會雜誌　三〇、
國家醫學會雜誌　二四〇、一、
台灣醫學會　五三、四、五、
助產ノ栞　一三一、二、三、
躬行會叢誌　三一、三、
臨牀石藥新報　三三、四、
校友會雜誌　二ノ六、
校友會雜誌　一〇、

桑原文庫
全　社
日本產科婦協會
醫學書院
日本神經學會
全　會
全　會
全　會
全　會
全　會
全　會
全　會
全　社
京都府立醫學專門學校
全　會
長崎醫學專門學校
全　會
三重縣立第一中學校
全　會
全　會
緒方助產婦學會
全　會
藥石新報社
滋賀縣立第一中學校
全　會
山口縣立德山中學校
全　會

日本助產婦新報　二〇、
同窓會雜誌　二八
軍醫學會雜誌　一六〇、一、
衛生新報　六八、九、
北越醫學會々報　一五、
京都醫學會雜誌　四ノ二、
同仁　二三、
中央醫學會雜誌　七三、
好生館醫事研究會雜誌　一四ノ三、
校友會雜誌　一〇、
東北醫學會々報　四、
東洋醫事新報　六、
鯢魚ノ內聽解剖ニ就テ　一冊　全　發行所　愛知縣立醫學專門學校
昇汞中毒ニ就テ　一冊　全　會
ウオッシュス眼科全書　一冊　全　陸軍軍醫學會
オルド病理解剖　一冊　全　社
フックス眼科全書　一冊　全　會
醫學字彙　一冊　全　雜誌社
東洋醫事新報　六、　全　會
鯢魚ノ內聽解剖ニ就テ　一冊　全　岡山醫學專門學校會
昇汞中毒ニ就テ　一冊　全　仙台醫學專門學校會
ウオッシュス眼科全書　一冊　故太田友市君紀念書籍トシテ堀田圭三君外有志ヨリ寄贈　全　私立東京醫學校編輯部
オルド病理解剖　一冊　上　岡島敬治君
フックス眼科全書　一冊　上　飯森益太郎君
醫學字彙　一冊　上

## ○四十年度金澤醫學專門學校十全會收入豫算書

| 目 | 豫算額 |
|---|---|
| 科 | 円 |
| 第一款　金澤醫學專門學校十全會 | 一、二四九、二三〇 |
| 第一項　特別會員寄付金 | 一四一、七三〇 |
| 第一目　職員寄付金 | 一四一、七三〇 |
| 第二項　通常會員會費 | 九四五、〇〇〇 |
| 第一目　醫學生會費 | 八三七、〇〇〇 |
| 第二目　藥學生會費 | 一〇八、〇〇〇 |
| 第三項　入會金 | 一二〇、〇〇〇 |
| 第一目　入會金 | 一二〇、〇〇〇 |
| 第四項　利子 | 四二、五〇〇 |
| 第一目　預金利子 | 四二、五〇〇 |

## ○四十年度金澤醫學專門學校十全會經費豫算

| 目 | 四十年度豫算額 |
|---|---|
| 科 | 円 |
| 第一款　金澤醫學專門學校十全會 | 一、二四九、二三〇 |
| 第一項　春季陸上運動會費 | 一九〇、〇〇〇 |
| 第一目　同　上　部 | 一九〇、〇〇〇 |
| 第二項　講話會費 | 三〇、〇〇〇 |
| 第一目　大會費 | 二八、〇〇〇 |
| 第二目　通常會費 | 二、〇〇〇 |
| 第三項　雜誌部費 | 四八〇、〇〇〇 |
| 第一目　雜誌費 | 四四六、四〇〇 |
| 第二目　通信費 | 一五、六〇〇 |
| 第三目　消耗品費 | 七、〇〇〇 |
| 第四目　製本費 | 一〇、〇〇〇 |
| 第五目　雜費 | 一、〇〇〇 |

| | |
|---|---|
| 第四項 ロンテニス部費 | 六〇、〇〇〇 |
| 第一目 ロンテニス部費 | 六〇、〇〇〇 |
| 第五項 劍道部費 | 五〇、〇〇〇 |
| 第一目 大會費 | 二五、〇〇〇 |
| 第二目 奬勵費 | 二五、〇〇〇 |
| 第六項 柔道部費 | 五〇、〇〇〇 |
| 第一目 大會費 | 二五、〇〇〇 |
| 第二目 奬勵費 | 二五、〇〇〇 |
| 第七項 弓術部費 | 五〇、〇〇〇 |
| 第一目 大會費 | 一五、〇〇〇 |
| 第二目 備品費 | 三〇、〇〇〇 |
| 第三目 南山修繕費 | 五、〇〇〇 |
| 第八項 會務費 | 七九、〇〇〇 |
| 第一目 備品費 | 二二、〇〇〇 |
| 第二目 印刷費 | 五〇〇〇 |
| 第三目 消耗品費 | 五、〇〇〇 |
| 第四目 雜費 | 七、〇〇〇 |
| 第五目 茶話會費 | 四五、〇〇〇 |
| 第九項 學術實習部費 | 八〇、〇〇〇 |
| 第一目 藥品材料費 | 五〇、〇〇〇 |
| 第二目 備品費 | 二〇、〇〇〇 |
| 第三目 雜費 | 一〇、〇〇〇 |
| 第十項 豫備金 | 五八、七三〇 |
| 第一目 同上 | 一、〇〇〇 |
| 第十一項 端艇基金 | 一、〇〇〇 |
| 第一目 同上 | 一、〇〇〇 |
| 第十二項 借入金償還 | 一二〇、〇〇〇 |
| 第一目 同上 | 一二〇、〇〇〇 |

## ○四十年度金澤醫學專門學校十全會校外特別會員會費收入豫算書

| 科目 | 豫算額 |
|---|---|
| 第一款 金澤醫學專門學校十全會校外特別會員會費 | 一、一六六、九〇〇円 |
| 第一項 校外特別會員會費 | 八〇五、八〇〇 |
| 第一目 三十九年度會費 | 四二五、八〇〇 |
| 第二目 前年度未納會費 | 八〇、〇〇〇 |
| 第三目 前納會費 | 三〇〇、〇〇〇 |
| 第二項 利金 | 三九、九〇〇 |
| 第一目 預金利子 | 三九、九〇〇 |
| 第三項 繰越金 | 三二一、二〇〇 |
| 第一目 繰越金 | 三二一、二〇〇 |

## ○四十年度金澤醫學專門學校校外特別會員會費支出豫算書

| 科目 | 豫算額 |
|---|---|
| 第一款 金澤醫學專門學校校外特別會員會費 | 五四五、七〇〇円 |
| 第一項 校外特別會員會費 | 四五三、二〇〇 |
| 第一目 雜誌費 | 三七九、二〇〇 |
| 第二目 通信費 | 五六、〇〇〇 |
| 第三目 雜費 | 一八、〇〇〇 |

第二項　豫備費　上　五四、〇〇〇
第一目　同　上　五四、〇〇〇
第三項　維持資金へ組入　上　三八、五〇〇
第一目　同　上　三八、五〇〇

## ○自明治四十年三月十七日至仝年六月廿四日　校外十全會費納付調書

| 金額 | 期限 | 氏名 |
|---|---|---|
| 金五圓 | (自三十七年度至四十三年度七ヶ年分) | 星野正齊君 |
| 金貳圓 | (自三十八年度至三十九年度二ヶ年分) | 澤賢吉君 |
| 金參圓 | (自三十五年度至三十七年度三ヶ年分) | 安宅治六君 |
| 金貳圓 | (自三十七年度至三十八年度二ヶ年分) | 高松岩吉君 |
| 金壹圓 | (三十六年度分) | 眞柄佐一郎君 |
| 金四圓 | (自三十五年度至三十八年度四ヶ年分) | 瀨尾順四郎君 |
| 金參圓 | (自三十七年度至三十九年度三ヶ年分) | 林篤君 |
| 金參圓 | (自三十六年度至三十八年度三ヶ年分) | 岡田剛吉君 |
| 金參圓 | (自四十年度至四十二年度三ヶ年分) | 津田博明君 |
| 金參圓 | (自四十年度至四十二年度三ヶ年分) | 高野友衛君 |
| 金參圓 | (自四十年度至四十二年度三ヶ年分) | 今村文碩君 |
| 金貳圓 | (自四十年度至四十一年度二ヶ年分) | 三股梅吉君 |
| 金參圓 | (自四十年度至四十二年度三ヶ年分) | 臼井丈吉君 |
| 金參圓 | 仝 | 佐々木靜君 |
| 金參圓 | 仝 | 田中基保君 |
| 金參圓 | 仝 | 五井康平君 |
| 金參圓 | 仝 | 淺田耕造君 |
| 金參圓 | 仝 | 說田順一君 |
| 金參圓 | 仝 | 佐藤武君 |
| 金參圓 | 仝 | 黒田道純君 |
| 金參圓 | 仝 | 藤井一雄君 |
| 金參圓 | 仝 | 大澤誠一君 |
| 金參圓 | 仝 | 松井長兵衛君 |
| 金參圓 | 仝 | 加藤鍬作君 |
| 金參圓 | 仝 | 田中新太郎君 |
| 金參圓 | 仝 | 森正英君 |
| 金參圓 | 仝 | 丹波橘二君 |
| 金參圓 | 仝 | 實達佐市君 |
| 金參圓 | 仝 | 山田茂樹君 |
| 金參圓 | 仝 | 永井人雄君 |
| 金參圓 | 仝 | 佐口榮君 |
| 金參圓 | 仝 | 玉森法靈君 |
| 金參圓 | 仝 | 竹中徹君 |
| 金參圓 | 仝 | 井上松三郎君 |
| 金參圓 | 仝 | 老川雪房君 |
| 金參圓 | 仝 | 猪飼善助君 |
| 金參圓 | 仝 | 額又太郎君 |
| 金參圓 | 仝 | 內田貞春君 |
| 金參圓 | 仝 | 岡忍君 |
| 金參圓 | 仝 | 南茂吉君 |
| 金參圓 | 仝 | 太田勘市君 |
| 金參圓 | 仝 | 吉田文平君 |

（會告）

金參圓（自四十年度至四十二年度三ヶ年分）

金參圓全　長村吉太君
金參圓全　濱田眞鉏君
金參圓全　朝日昊君
金參圓全　原季君
金參圓全　松江鎭五郎君
金參圓全　渡邊關重君
金參圓全　塚本富彥君
金參圓全　荻原卯太郎君
金參圓全　中村欣一郎君
金參圓全　天野長重君
金參圓全　竹內義一郎君
金參圓全　稻崎重助君
金參圓全　諸橋林太郎君
金參圓全　鈴木茂君
金參圓全　鈴木修一郎君
金參圓全　赤尾肇三君
金參圓全　岡田秀造君
金參圓全　井口爲四郎君
金參圓全　林秀雄君
金參圓全　中島正一君
金參圓全　市川久多君
金參圓全　數見宗一郎君
金參圓全　前田典三君
金參圓全　不破才三郎君
金參圓全　武藤匡一君
金參圓全　六嘉孝光君

金參圓全　岸岡龜之助君
金參圓全　松崎源次郎君
金參圓全　岩崎衷藏君
金參圓全　田邊俊之君
金參圓全　山村銹二君
金參圓全　平澤謙齊君
金參圓全　古屋榮治君
金四圓（自三十八年度至四十三年度六ヶ年分）　岡本京太郎君
金參圓（自三十九年度至四十三年度五ヶ年分）　島田吉三郎君
金參圓（自四十年度至四十二年度三ヶ年分）　林田信平君
金參圓（自三十八年度至四十年度三ヶ年分）　上阪政太郎君
金參圓（自四十年度至四十二年度三ヶ年分）　高井魯一君
金貳圓（自三十九年度至四十一年度二ヶ年分）　藤浪謙君
金參圓（自四十年度至四十二年度三ヶ年分）　林可一君
金參圓（自三十八年度至四十年度三ヶ年分）　島誠郁君
金參圓（自四十年度至四十二年度三ヶ年分）　河合忠次君
金參圓（自四十四年度至四十六年度五ヶ年分）　小野醇吉君
金參圓（自三十四年度至三十六年度三ヶ年分）　本田三郎君
金四圓（自三十七年度至四十年度四ヶ年分）　本田三郎君

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

# 廣告

和歌山縣ニ奉職中逝去セラレタル學友關屋林之助君ノ爲メ余輩同窓相圖リ聊カ資ヲ募リ紀念ノ典籍ヲ購ヒ之ヲ十全會ニ寄贈致度ニ付有志ノ諸君ハ御賛助ノ上御出金ヲ乞フ

但シ出金額ハ金參拾錢以上トシ明治四十年七月卅一日迄ニ生沼曹六（東京帝國大學醫科大學生理學教室内）又ハ田中一次郎（石川縣金澤病院外科部）両名ノ内へ御拂込アリタシ

明治四十年六月

| | | |
|---|---|---|
| 發起人 | 在東京 | 生沼曹六 |
| | 在金澤 | 田中正一 |
| | 在金澤 | 田中一次郎 |
| | 在金澤 | 越野義三郎 |
| | 在金澤 | 北川健三 |
| | 在東京 | 森田齊次 |

（姓名イロハ順）

## ○故太田友市君紀念書籍等購入決算報告

収入ノ部

一金三十五圓九十五錢也　有志者寄附金總額（前々號報告ノ通リ）

支出ノ部

一金三十五圓九十五錢也

内譯

| | |
|---|---|
| 一金九十八錢 | 通信料 |
| 一金八圓二十五錢 | フックス眼科全書 |
| 一金九圓 | オルト病理解部（眼之部） |
| 一金七圓五十錢 | ウオツシユス眼科全書 |
| 一金參圓 | 醫學字典 |
| 一金壹圓十九錢 | 郵稅 |
| 一金四圓七十錢 | 寫眞引延額、小判一葉代 |
| 一金壹圓 | 製本料 |
| 一金三十三錢 | 小野慈善院寄贈 |

總計　金參拾五圓九十五錢也

右之通リ結算報告候也

明治四十年五月　會計總代　堀田圭三

## ○故太田友市君紀念書籍等始末報告

フツクス眼科書　一冊
オルト病理解剖　一冊
ウオツシユス眼科全書　一冊
醫學字典　一冊

右十全會寄贈

寫眞及額

右金澤醫學專門學校寄贈濟々堂揭出

寫眞小判一葉

眼科室寄贈

右ノ通リ

笠雋吉郎
發起人　月原秀範
堀田圭三

小生儀五月十三日伯林發西比利亞ヲ横斷シ本日無事歸朝致シ候間此段辱知諸君ニ謹告シ併セテ在歐中之御厚情ヲ謝ス

六月二日

飯森益太郎

ドクトル　富士川　游主幹

# 治療新典

明治四十年六月五日第一冊刊行
毎月　一冊定期刊行○一冊正價金三十錢
○六冊分前金郵稅共金一圓六十錢○十二冊分同金三圓

治療新典ハ、實際醫家ノ參考ニ資スルノ目的ヲ以テ、各個疾病ノ治療法ヲ系統的ニ敍述セルモノニシテ、泰西諸大家ノ講本及ビ講演ニハ固ヨリ、幾多ノ寶函、中央襍誌、週報、月報及ビ爾他ノ諸雜誌ニ出デタル諸家ノ治療ニ關スル論說ヲ網羅シ、原因療法、特殊療法、根治療法、頓挫療法、殊ニ證候的療法ニ重ヲ置キ、普通ニ應用セラルル治療方法、藥方、器械ノ應用、手術等ハ成ルヘク詳細ニ記述シ、理學的療法、衛生食餌療法等輓近盛ニ行ハルル療法ヲモ詳ニ記載シ、治療新典ノ名ニ背カサルコトヲ期ス、其體裁及ヒ內容ニ關スル梗概ハ左ノ如シ

「治療新典」ハ毎月一冊宛刊行シ、一年十二冊分ヲ以テ一卷トス○一卷ノ紙數ハ凡ソ一千二百頁トス○六年分、七十二冊、全紙數凡ソ七千頁ヲ以テ完結スヘシ○故ニ「治療新典」ハ一部ノ書籍ヲ別チテ雜誌ノ體裁トナセルモノニシテ六箇年ノ後ニ至レハ全部七卷七千頁ノ大治療書トナルヘシ○六箇年ノ後ニ至レルモ、「治療新典」ハ繼續刊行更ニ前年度ニ於ケル各個疾病ノ治療法ニ關スル諸家ノ論著ヲ敍述シ、以テ之ヲ從前ノ記述ニ按續セシメ、補遺ノ卷トシテ毎年一卷（毎月一冊ツヽ、十二冊ヲ一卷トス）ヲ刊行スベシ○故ニ「治療新典」ハ六箇年間ニ結了スヘキ「大治療書」ノ刊行ヲ了レル後、引續キテ毎年度ノ「治療年報」ヲ編纂シテ以テ「大治療書」ノ遺ヲ補ヒ、古ヒタルヲ新ニシ、以テ該書ノ價値ト用途トヲ永久ニ保存セシムルモノナリ

## 第一卷第一冊目次

呼吸器病療法
○治療通論
氣候療法
大氣療法
水治療法
別ニ每冊ニ「新藥」「新方」「雜錄」等ノ諸欄ヲ置キ、斬新ニシテ實際醫家ニ裨益アル記事ヲ擧ク

鑛泉療法
榮養療法
塗布法
注射法
吸入療法

○治療各論
主要證候療法
咳嗽及喀痰
呼吸困難
氣道出血（喀血）

上部氣道疾患
急性鼻加答兒
慢性鼻加答兒
齶血
鼻呼吸障碍

我社曩ニ「治療新報」ヲ刊行シ、幸ニ醫家諸君ノ眷顧ヲ得テ、其業緒ニ就キタリ、今ヤ「治療新典」ヲ刊行シテ以テ治療學界ニ盡スノ宿志ヲ遂ケントス、幸ニ熱心篤學ナル諸君ノ贊助ヲ祈ル

東京市本鄉區龍岡町三十四番地　治療新報社

# 消化機病學
# 第三回講習

（講習期）自五月一日
至七月十日

（講習生）三十五名募集

右講習生ヲ募集ス

東京市麹町區內幸町一丁目三番地
胃腸病院

## 金澤醫學專門學校 十全會會則摘要 （明治三十八年五月改正ス）

一本會ハ本校職員、卒業生、學生及本校ニ緣故アル者ヨリ成リ職員及卒業生ヲ特別會員トシ學生ヲ通常會員トシ本校ニ緣故アル者ヲ賛助會員トス

本校職員卒業生及學生ハ總テ本會會員タルノ義務アルモノトス

一本會ニ講話部、雜誌部、學術實習部、ロンテニス部、劍道部、柔道部及弓術部ノ七部ヲ置ク

一本會一切ノ經費ハ特別會員及通常會員ノ負擔トス

本校職員タル特別會員（校內特別會員）ハ會費トシテ相當ノ金額ヲ寄附スベキモノトス

本校卒業生タル特別會員（校外特別會員）ハ會費トシテ一ケ年金壹圓ヲ納ムベシ但シ一時ニ金參圓ヲ納ムル者ハ五ケ年ヲ一期トシ該期間本會發行ノ雜誌ヲ配布ス

將來卒業ノ特別會員ハ最終授業料納付ノ節必ス一時ニ三ケ年間ノ會費金參圓ヲ納ムベシ

通常會員ハ會費トシテ一ケ年金壹圓八拾錢ヲ納ムベシ

特別會員ニシテ引續キ三ケ年間會費未納者ハ除名ノ上一般會員ニ通告ス

一本會ノ會計年度ハ毎年九月ニ始リ八月ニ終ル

一講話部ニ於テハ毎年一回以上講師ヲ聘シテ道義上ノ講話ヲ聽聞シ又隔月一回醫學及藥學ニ關スル講談會ヲ開ク

講話部ニ於テハ特ニ語學會ヲ開クコトアリ

一雜誌部ニ於テハ毎年五回醫學及藥學ニ關スル會員ノ演說談話並ニ本校ノ現況、會員ノ動靜等ヲ記載シタル雜誌ヲ發行シテ會員ニ頒ツ

雜誌部ニ於テハ本會所屬ノ圖書ヲ管理ス

一學術實習部ニ於テハ專ラ小野慈善院ノ患者ニ就キ診察治療ヲナシ學生ヲシテ臨床實習及調劑實習ヲナサシム

（運動部規定ニ關スル規定摘要ハ畧ス）

## ▲投稿者心得七則▼

一投稿用紙は中折紙を用ゐ必ず楷書たるべし殊に洋字は字體を明かに記入せらるべし

一端書洋紙等に認めたるもの又は字體亂雜なるものは總て沒書とす

一誌上匿名を望まるゝも原稿には必ず住所姓名を記入せらるべし

一言の政治に涉り或は德義に背くものは一切登載せず

一未完の原稿は採錄せず

一原稿採否の權は編輯長にあり

一一旦寄送せられたる原稿は返戻の需めあるも之に應せず

十全會雜誌部


明治四十年六月二十五日印刷

明治四十年六月二十九日發行

石川縣金澤市池田町二番丁廿一番地

編輯兼發行者 山本兵三郎

石川縣金澤市尾張町八十二番地

印刷者 宇野孝太郎

同所

印刷所 活文堂 【電話六十五番】

發行所 金澤醫學專門學校十全會